

浄土

第二十 月 號



昭和十四年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十四年十一月廿日印刷納本 昭和十四年十二月一日發行

第五卷 第十二號

◇仕奉後銃・久持忍堅◇

◎一圓の淨財・一年の慰問

君國のために身命を賭した白衣の勇士達は今や到る處に戦傷を癒し、病苦を養ふておられます。これ等の方々に心の糧として吾等が誇りとする、信仰の伴侶雑誌「淨土」を贈つて法味を愛樂して頂かうと思ひます。何卒この聖なる運動に速時參加して下さい。

病院
慰問

白衣の勇士に法味を捧げよ

◇全國陸海軍病院の全部へ毎月三十部乃至五十部の雑誌「淨土」を贈呈して白衣の勇士達に法味を捧げた
いと存じます。

◇御一人一圓の淨財を御喜捨下さい。一年間毎月雑誌が病院へ参ります

◇毎月五千部は是非入用です。五千人の有志者が必要です。御奮發下さい。

◇個人でも、團體でも、亦金高が一圓以下でも結構です。兎も角この聖き運動に隨喜參加して下さい。

◇御送金は淨土宗務所事務部宛に！領收の證には宗報誌上に御芳名を掲載します。

◎一冊の淨土・一生の歡喜

理化學研究所製品
帝國學士院賞受領
日本化學會櫻井賞受領
世界十一國製法特許



健康増進に 理研ビタミン

過勞を回復させる

ビタミンAの不足は運動選手をスラムプに陥れると言ふ。全身の新陳代謝に大きな作用を営むビタミンAが體活力増進に、疲勞の回復に重要な要素たることは勿論なのであります。

風邪ひかなくなる。

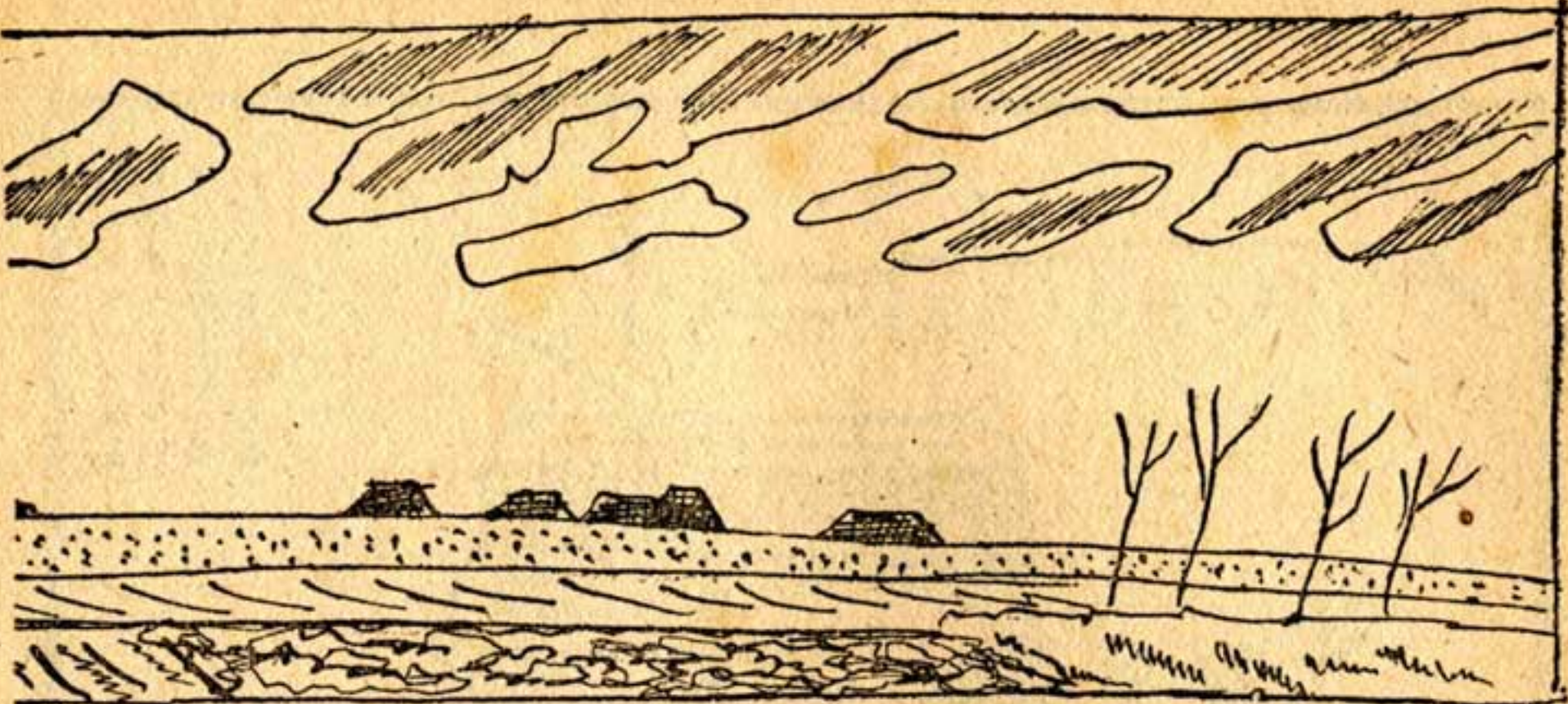
風邪の豫防にビタミンA・Dの効果は有名です。これからは過勞から風邪をひく事が多いから、風邪ひき易い體質の人は勿論、健康者もビタミンA・Dを充分に攝つて呼吸器を護るべきです。

推奨される純良品

古くは肝油、最近には種々の肝油劑がありますが、理研ビタミンは肝油から抽出した純ビタミンA・Dを豆粒大の小球に濃縮せる純良製品です。ビタミン含有量も消化吸収も斷然優秀で、健康増進に活潑な効果を信賴推奨されて居ります。

四〇球…二圓 一〇〇球…五圓 藥店にあり

株式會社 五圓商店



◇ 浄 土 第五卷 第十二號 十二月號 目次 ◇

表紙扉繪……………熊倉鎮雄

目次カット……………鈴木金平

佛名會について……………(四)

阪根翁のことと吉田絃二郎……………(六)

梅若實翁の修業逸話……………松本龜松(二〇)

信仰 實話 出入に禮す……………金田明進(三)

佛の慈悲……………鳩山一郎(二六)

親の立場……………三田谷啓(三二)

奇蹟の石……………三木武夫(三七)

信仰 相談……………中村辨康(四)

野戰病院日記抄……………東慈道(一〇)



信行道場を訪れて……………本誌記者(三八)

信仰座談 阿彌陀佛の存在に就て……………浄き友の會(三七)

傷病兵慰問行 尊 い 頁……………渡邊榮子(三〇)

童話 雪 玉(ゆきだま)……………松原敏夫(四〇)

歌 壇……………與謝野晶子選(三七)

俳 壇……………太田耳動子選(四九)

日常動行式解説

讀嘆しつゝ、念願しつゝ、中村操康……………(五〇)

入信實話 亡き父母の愛……………小宮繁八(二六)

征旅の回想……………安田秀賢(二八)

十二光佛讚歌……………中島圓信(三三)

編輯後記……………(三七)

◇浄土 第十五卷 第十二號 十二月號 目次◇



佛名會

十二月の佛教行事

「公事根

源下」に『御佛名、十九日、今日より二十一日まで三箇日なり、(中略)此佛名と言ふは三世の諸佛の名號を唱へて六根の罪を滅する心なり。誠に佛名經に説かるゝ所の功德はかぎりなきにや。承和の頃は毎年佛名二箇日の間は諸國にて殺生禁斷の由格に見えたり』とあります。過去、現在、未來三世の佛三千の御名を唱えれば一切の罪業が悉く消えと言ふ、佛名經所設の主旨により毎歲歲末十九日より三日間(或は八日より三日

間、十三日より三日間とする所もある)を期して一年間に造れる罪障を懺悔し三千の佛名を唱へて三千回禮拜する法會を名づけて佛名會と呼ぶのであります。

我が國で公に行はれたのは淳和帝の御代天長七年の暮に宮中に於て勤修されたのが始めてありまして、爾來長く恒式として傳つてゐましたが室町時代に到つて廢されました。而し民間では現在も尚ほ各寺院で毎年重要な佛教行事の一として執行されてゐます。

佛眼に映じた人間の姿は誠に罪惡の權化、生死輪廻の凡夫に外なりません。

經に「一人一日の中に八億四千の念あり、念々の中の所作、皆是れ三塗の業なり」と示されてあります。それがそれほどに私たちの日々には犯す身口意、三業の罪障の類は數限りもないのであります。それは人間の無明(佛智から見た人間の無智)によるもので佛の覺位に到る迄は如何とも出來ないのであります。然し、無智の凡夫であるからと言つて佛が見離すのでしたら一切衆生を濟度すると言ふ佛教の面目がたない譯です。

清淨の水のみあつて、衆生罪業の垢を洗ふ可し』と説き、又「爾時、釋迦牟尼佛、告二大衆一、我會往昔、無數劫時、於二妙光佛末法之中、出家學道、聞二是五十三佛名、聞已合掌、心生二歡喜、復教二他人、令得二聞持、他人聞已、展轉相教、乃至二三千人、此三千人、異口同音、稱二諸佛名、一心敬禮、如是、敬二禮諸佛、以二因緣功德力、故即得二超越數億劫生死之罪。…」と説いてゐるのであります。

師走、雪空寒い朝夕、三千佛の御名を讃仰禮拜する道俗の上には梵風遠く吹いて、三業の塵勞を拂ひ、衆罪の霜露を悉く消してくれる事でありませう。

川端祐輔

淨土

十二月號

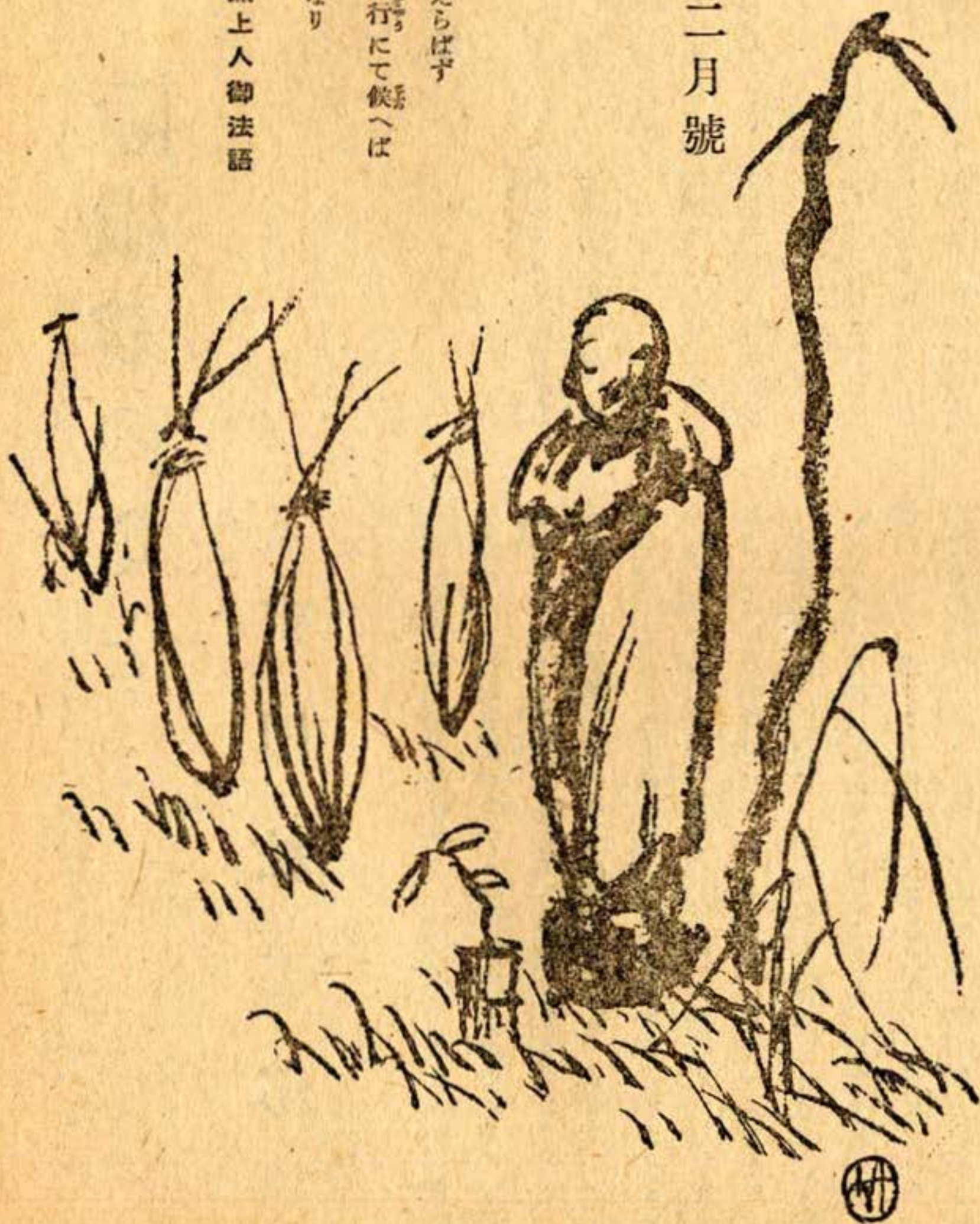
念佛の行は本より

行住座臥時處諸縁をえらばず

身口の不淨をきらはぬ行にて候へば

易行住生とは申候なり

法然上人御法語





阪根翁のこと

吉田 絃二郎

法を守る

阪根翁が御先祖をはじめ恩人、一族の方々の法要を怠らず営まれたことはすでに述べた。ともかく御近所に住んでゐる人々は、お念佛の聲を聞いたばかりで、今日は誰々様の御命日であるといふことがわかるくらゐであつたが、阪根翁が法要を営まらるゝに、大切な御先祖方の法要には大抵三度くらゐに分けて佛事を勤められた。第一日は極内輪の親戚の人、第二日は親しい人、第三日は一般の人々といふやうにして丁重な法要を営まれた。そこで或る人が阪根翁に向つて「あなたは幾度にも分けて法要をなさるが、御身内の方なら御身内の方丈けで

法要を営まれたら、それでよいではありませんか。世間一般の人々のためにわざ／＼法要を繰り返されるのは形式的でもあり、無駄でもある」と言つたことがあつた。そのをり阪根翁は次のやうに答へられた。「いや、あなたは左様にお考へなさるか知らぬが、わたくしの考へ方はちがひます。成る程身内の者だけで營めばよいといふのは理窟である。しかしさういふことをすれば世間では（阪根は各番で御先祖の法事もせぬ）と言ふでせう。これは法を破ることになる。わたくしが悪く言はれるのはかまはぬが、法を破つてはならぬ。だからわたくしは形式的と思はれるか知れぬが法事といふものは丁重に致すのでございます」と答へられた。

いつたい世間には精神さへこもつてゐれば形式などは何うでもいいといふ風に考へてゐる人が多い。

無論形だけで魂のないのは排斥しなければならぬが、内に魂がこもつてゐれば外に正しい形があらはれて来る筈である。

西郷南洲翁が江戸城受取りのためにはじめて江戸城に入つた時の話といふから、慶應四年四月十一日のことであらう。

南洲翁は城受け取りの役目として江戸城の奥へはひつて行つた。元來なら式臺に上れば諸侯といへども佩刀を帯びることはできないことになつてゐた。そして、大名格の者でなければその佩刀を手にして奥へ入ることはゆるされなかつたのである。これが三百年來江戸城内の掟であつた。西郷隆盛は本來なれば江戸城受取りの役人として、派遣されたのだから大名以上の格式を持つてゐた筈であるが、南洲翁は式臺に一步足をかけた時自分の身分といふことを考へた。いはゞ西郷は一陪臣であり、田舎侍であるに過ぎない自分自身をよく知つてゐた。そこで南洲翁は佩刀を手にとつたものゝ、その佩刀を手

して大名のやうな形式で奥へ入るに忍びなかつた。南洲翁は鞠躬如として自分の刀を抱へ込んで奥へ入つて行つた。

あの太兵衛肥満の大西郷がおづ／＼と佩刀を抱きかゝへて江戸城の奥へ進んで行つた風貌を想像するだけでも微笑ましいことである。

恐らく他の役人達は俄に大名にでもなつた氣持で大刀に反を打たせて江戸城内を闊歩したであらうが、南洲翁にはそんな眞似はできなかつた。「わしは輕輩だ。陪臣だ」といふことを知つてゐた南洲翁は陪臣としての法をわきまへてゐた。陪臣としての形式を敢て犯さなかつた。法を守り、形式を守るところに南洲翁の人となりのゆかしさが偲ばれる。

乃木將軍にもやゝこれに似た話がある。乃木將軍の下に某大尉副官が配屬せられた。その副官はさる大名出の華族であつた。

乃木大將はこの大尉副官に對しては決してぞんざいな言葉を使はなかつた。

「何々副官は昔なら、われ／＼ごとき輕輩ではなか／＼

お目通りも叶はぬ御身分の方だ」と言つて、家人にも注意し、常に丁寧な態度を持してゐたといふことである。

家柄を尊敬するといふことも一つの形式尊重であるといふ人もあらう。しかしそこにかへつてゆかしいが乃木將軍の心がけがある。

播かれたる種子

阪根翁がその家政女學校のために畢生の努力をさしげられたことは今日では世間に知る人も多いが、それは並ならぬ苦心と献身と信仰と忍従の連續であつた。そこにわたくしどもは教へられるところが多い。

何事にも因縁がある。家政女學校の創立にも因縁があつた。或る時名阿上人が九州地方へ巡錫されたことがあつた。その旅の途上上人は九州邊の或る人から女子の教育といふことについていろいろ話を持ちかけられた。今日の女學生の教育をこのまゝに放つて置いてよいものであるか。個人主義や唯物思想や無神論などの思想が一般社會を風靡し、その結果若い女性たちの献身、信仰、柔和といふやうな美德がやゝもすれば舊い道德として冷笑

されようとしてゐる。かういふ風潮のまゝにして若い女學生達を放つて置いたら明日の日本は何うなるであらう。恐らく當時の心ある父兄達は自分等の子女の教育について誰しも同じ不安を感じてゐたであらう。これは何とかしなければならぬ。

この旅の話を名阿上人が京都に歸つて來て本光院で語られた。たま／＼そのをり上人のお話を拜聴した一人に阪根翁があつた。播かれたる一粒の種子は地に芽生えたわけである。まことに尊い芽生えであつた。阪根翁は何とかして正しい女子の教育をと志を立てられたのである。

さて學校を建てるとなると先づ第一に資金である。資金の出し方について阪根翁は成るべくたくさんの人に少しづつ出して貰ふといふ方法を取つた。たび／＼高野山に登つた翁は法然上人のお墓がいたく荒れはてゐるのを見ては心を痛めた。そこでお墓の修理といふことになのであるが、そのやうな場合たとひ自分一個の力でできることであつても、決して自分ひとりではしない。必ず多勢の人に話しかけて、多勢の人から少しづつの寄附

を仰ぐといふ方法である。すなはち善根は決して自分ひとりだけで積むものではない。善根はみんなと一緒になつて積むべきものであるといふのが兼々翁の考へであつた。

印度の托鉢僧たちは、物を貰ふために托鉢をさうげて歩くのではない。眠つてゐる人々の魂を呼びさまして慈悲の商根を積ませるために、鉦を打ち鳴らして巷を托鉢するのだといふタゴールの詩を讀んだことがある。

阪根翁もかういふ意味では、魂の世界の托鉢僧であつたといふことができやう。眠つてゐる魂を揺り起して善根を積ませたのであつた。

アメリカの詩人ワルト・ホイットマンの詩の中にもよく「いつしよに」といふ言葉が出て来る。「小鳥も草も木も蒸汽船も太鼓の音も、牛乳配達もいつしよに」といつたり、「人類すべていつしよに」といふ言葉がよく見出される。東洋流にいへば草も木も石も小鳥も悉皆成佛である。東洋思想の影響を受けた哲人エマアスンあたりの感化がホイットマンの詩にあらはれたのであるかも知れぬが。

すべての昔からの聖者たちの考へは「みんなといつしよ

に」といふことであつた。阪根翁は「みんなといつしよに」といふ古人の心を如實にあらはされた人であつた。

家政女學校創立に際しても翁はこの「善根は多勢の人と共に積む」といふ信念から出發した。八百人の寄附者を説きつけて一ヶ月に十錢づゝの寄附を願ひ、それを基本財産として學校を維持して行くことにしたのである。しかもその八百口の中三百口は主として翁自身まとめることにした。一口に一ヶ月十錢づゝの寄附八百人を集めるといへばさしたる難事でないやうに想像する人もあらうが、これはなかなかの困難な事業であつた。文字通り寢食を忘れ、粉骨碎身の事業であつた。體のいい門前拂ひ、居留守等の不快な経験は數限りもなかつた。普通の人であつたら棒のやうになつた足を引き摺り、つひに歩くことさへ出来ない程に疲れ果て、街頭に佇立しては絶望的な歎息をくりかへすこともあつたであらうが、翁はそのやうな場合にも決して失望しなかつた。心を動かさなかつた。玄關拂ひを喰つても、斷られても決して心を亂さなかつた。そして袂の中に珠數を爪繰りお念佛を唱へつゝ靜かな足どりで京の町を歩いて行かれた。



抄記 日院病戰野

道 慈 東

三月二十五日

昨夜も一晩中、悪夢と不眠とに悩まされた。夜がほのぼのと明るんでくるのが待遠しくてならなかつた。夜が白み始めた頃、雀が五六羽軒端に来て頻りに囀る。患者達は殆んどまだ深い眠りにおちてゐる。雀の聲だけがリズムミカルに流れてきて、混濁した頭を清めてくれる。明るみが次第にましてきて、蚊帳の青さが目にしみるやうになつた。ほんやりと蚊帳を通して屋根裏の窓から、向ふの如何にも支那らしいそりかへつた屋根を眺めてゐたら、雀がその屋根の尖端で二三羽戯れてゐるのを發見した。嬉しさに轉つてはじやれあつて飛び交つてゐる。生きることの歡びをまざ／＼と見せつけられた思ひがして、愕然とした。今の私にとつては、生きて行くことがどんなに苦しいことか。そしてそのため日々の生を歡びで享受したことが、曾つて一度もなかつたやうな錯覺さへ生じてくる。また、生の歡びを味はへる日が、再び巡つて來

ないやうにも思はれてくる。恐ろしいほど淋しい心理だ。雀はもう姿を消してしまつた。

屋根裏を縦横に走つてゐる古びた大きな梁と、その梁の一つにかけられてゐる汚ない巨大な木額とが、寒々しいものに見える。額には雄健な字が横に四つ刻みつけられてゐるが、最後の廟と云ふ字がどうにか讀めるだけで、あとははつきりと讀めない。

こゝに收容されてゐる患者は、程んで間もなく退院出来るやうな輕症患者ばかりだ。少し長びくやうな患者は、みんな後方の豫備病院へ轉送されてゆく。だから、同室の患者もみんな頗る元氣だ。起き上れないのは私ぐらひで、大半の者は圍棋に興じたり、將棋をさしたり、レコードをかけたりして、案外のんきに遊んでゐる。たゞどんなに面白さうに騒いでゐても、一沫の淋しさが彼等の身體につきまとつてゐる。笑聲が頭をさすやうに聞えたり、レコードが喧騒に重苦しく聞える。時によると、それ等のことが耐えがたいほど

うとましく思はれて、笑ひ興じてゐる人々を憎みたくなる。熱のためにいたみつけられてゐるせゐであらう。それにしても、うらめしい心の動きた。人間の感情ほど利己的なものはない。爽快な感情とは結局自分の慾望が充たされた時に、生じるものではないか。自分が一緒に面白く遊べないために、人々が笑ひ興じてゐることを嫉ましく感じる。情ない限りだ。

一年も二年も遠く故國を離れ、いとしい妻子と別れて戰場を馳驅した戦友だ。妻も子も忘れて無念無想、たゞ／＼大君のため國のために身を棄てて、彈丸の雨降る戦野を馳けめぐつた戦友だ。それだけ、少しの暇でもあれば、彼等は先づ第一に妻子を想ひ、故郷の山河を戀ふる。まして、或は傷つき、或は病に倒れて、索寞たる病室に淋しく横はる身ともなれば、妻子への愛慕の情は、故國への愛慕の念は、一入強まつてくる。慰安でもなければ、どうしてこの無聊が過されよう。レコー

ドか將棋などの、わずかばかりの娛樂が彼等にとつてはたゞ一つの慰安だ。子供みたいになつて、はしやぎまわつてゐるのも、無理ならぬことだ。それを病氣とはいへ嫉ましく感じる今の私だ。全く情ない。淋しい戦傷病士のためだ、うんと騒がせようと、心にくりかへし云ひ聞かせるが、レコードはやつぱりうるさく聞えるし、人々の笑聲をどうしても嫉ましく響く。凡人凡情をどうすることも出来ない。淺間しい人間の感情に泣きぬれて、日は暮れて行く。

夕方、診察がある。一昨日と同じく五軍醫殿に診てもらふ。腰かけて診てもらつてゐたが、また倒れさうになる。然し病狀はまだはつきり判らないらしく、頻りに首をかしげて腹部を診てゐられた。夕食の時、衛生兵に尋ねてみたら、今のところ「マラリヤの疑ひ」になつてゐるが、と軽く答へて、次のやうにつけたした。「昨日とつた耳血にはマラリヤ菌は出なかつた。それに、マラリヤならこんな

に長く熱がひかないわけはない。いまの症状ではむしろ「腸チブスの疑ひ」の方が濃厚のやうだ。なんと恐ろしい答へだらう。腸チブスとはつきり宣告されたのではないから心配しないように、と衛生兵は心から慰めてくれたが、不安は次第に深まつてゆく。病名の決定した患者には、枕もとに官等氏名と病名の書かれた紙札がはられてゐるが、私のところ

に空想を斷乎として否定してしまふ。生命力がまだ弱つてゐないのか、それとも、生來の樂天的氣質が、こんな時にも力強く作用するのか、この確信を唯一のたよりとして、不安な病狀に面してゐるが、たゞ、これからさきどれほど苦しまねばならないかと思ふと、心はしつかり定まらないで、不安が次第に擴がつてゆく。

三月二十七日

今日も美しく晴れわたつた上天氣だ。澄みきつた青い空が屋根裏の窓から別の世界のやうに見える。三月と四月は雨季で、連日豪雨に見舞はれると云ふのに、ずいつと天氣が續いてゐる。雨季を除いては、程んど雨を見ないこの地方だ。今月はなんとなく雨が懐しく想はれてならない。長い間、雨といふ雨が降らないためでもあらうが、それよりも、弱りきつた病人の意識には、乾ききつた空氣や、明るく空の色や、眩しい陽の光は、耐えがたいほど強烈に感じられて、霖雨肅々と降る灰

色の世界が、したはしく想はれてならないからだ。解熱劑の注射は毎日二三本宛うつてゐるが、熱は相變らず四十度前後を往來してゐる。冷凍魚が多量に來たんだらう、この二三日は朝から好物の鰯の吸物が食膳に上るが、食欲が全然ない。「美味しい吸物だ、さあ／＼おあがり」と衛生兵が子供をすかすやうに、箸をとつてすゝめてくれるが、ちつとも食べたくない。歩くのが苦しくて、便所に行くのが億劫でならない。

夕方に診察がある。K軍醫殿はほんとにやさしくて親切だ。なれるに従つて信頼の情が深まつてゆく。診察が終つて、自分のベットに歸つて來たら、衛生兵が小走りに追つかけて來て、「東さん、病室を代るんだよ。手まわり品を整理して……」と囁いた。診察の時に、軍醫殿と班長殿がコソ／＼と話し合つてゐられたが、その時、

病室の相談をされたのだらう。間もなく、知らない衛生兵が二人来て、

「毛布を運ぶ間、暫くこゝでやすんでいらつしやい」

と素早く私の毛布をクル／＼と巻いて運び去つた。私はその間に日用品を包んでみたが、すぐ衛生兵は歸つて來た。そして、私が持つて行かうとした布呂敷包みを、私から無理に取つて、

「では移りませう。静かについて來て下さい」とやさしく寄り添つて歩き始めた。私は患者達の好奇の眼を、背後に感じながら、不安な氣持に胸をふくらませて病室を去つた。導かれて行つた所は、廟内の建物ではあらうが、ずうつと奥の小さな汚ない家だつた。家の中はうす暗くて、氣味悪いほどだ。

扉を排すると、入口と同じ廣さの通路が部屋を二分して、その兩側に前の病室と同じやうに、二尺の高さに板がはつてある。奥行は二間半もあらうか。汚ない藁が板の上に雜然

と散らばつてゐる。左側の中央あたりに患者が一人寝てゐる。私の寢床は既に右側の中央に作つてあつた。起きてゐれないので、すぐやすんだが、毛布の兩側は汚ない藁ばかりで、足をちよつと伸ばしたら、バサリと味氣ない音がした。淋しさが部屋一ぱいに充ちてゐる。

衛生兵が氷枕をあてゝくれた。勿論、生ぬるい水ではあるが、とても氣持がいい。鹽水をとりながら、背の低い方の衛生兵が、

「僕達二人がこの傳染病室のかゝりだから、何でも遠慮なく云つて下さい」

と話しかけた。腸チブスらしいと、一昨日衛生兵に教へられた時、あれほど心配したのに、病室が變つた今まで、何のため病室を代へられたのかさへわからずにゐた。あゝ遂に隔離されたのか、傳染病になつたのかと、始めて愕然とした始末だ。

「ほんとに腸チブスに確定したんですか」「いや／＼、まだ確定したわけではないんですが、軍醫が大事をとつて、隔離させたんで

す。そう心配しないで氣を樂にたさいよ」

體溫計を衛生兵にわたした。四十度を突破してゐるらしい。すぐ解熱劑の注射をうつてくれた。それから、便所は傳染病室のだけを使用すること、便所の歸りには必ず手を消毒することなど、いろ／＼と注意してくれた。私の病氣もとう／＼くるところまで來たらしい。隔離されたと知ると、やるせない淋しさが湧いてくる。そして、こんな汚ない部屋ではなか／＼癒るまいと思ふと、私の將來は眞闇になつたやうだ。

もう夕闇がしのび寄つたらしい。窓のない部屋だから、外界の變化がサツパリ判らない。入口の扉からからうじて夕闇のけはひが感じられるだけだ。

夕飯はうすい粥汁と、何もはいつてゐない汁だけだ。チブスの疑ひだから、かたい物はいけないんだらう。然し粥汁がとてもうまくて、一滴も残さず飲んでしまつた。眞向ふの患者はかなりの重症らしく、附添ひの衛生兵

らしい若い兵が、白いガウンを着て、小便をとつてやつたり、粥汁を飲ましたりしてゐる。そのこまめな看病が妙にいたくしく目にしみる。話しかける氣にもならないので、籠に挨拶だけをした。間もなく、衛生兵が一人ぶりの白い敷張をつつてくれた。

またもの憂い夜が訪れた。身體が焼かれてゐるやうに熱い。寝苦るしくてならない。

三月二十八日

昨夜は珍らしくよく眠れた。寝苦るしいままに、いろんな事を考へ続け、はては、今日は亡父の命日だつたな、なんて事を想ひ出してゐるうちに、連日の疲れのためか眠つてしまつたらしい。衛生兵が體溫をとりに来たので、やつと目が覺めたほどだつた。よく眠つたせい、氣分が頗る爽快だ。毎朝、衛生兵が睡眠の程度を尋ねるが、不眠ほど身體にこたへるものはない。氣分がいいので衛生兵と無駄口をきく。太つて背の低いずんぐりした方はKと云ひ、ひきしまつてすらりとした方はHと云ふ一等兵だ。二人とも二十八九らしい。Kが「東さんはいくつ？」と聞くから、「三十だ」と答へたら、不思議さうな顔をして、「嘘だらう。せいふく二十四五だらう」と輕輕に問ひかへした。

「嘘なもんか。かう若く見えても、子供が二人あるんだよ。ほんとにしないなら、寫眞を見せよう」

大體私は何時も若く見られるが、その度に馬鹿にされたやうに覺える。それで、私は出征の時に家族みんなで撮した寫眞を見せる氣になつた。Kは寫眞を見てゐたが、やつと納得したらしい。

「そりかなあ、見かけによらないものだね」とさも感心したやうに寫眞に見入つてゐた。そこにKが這入つて來たので、また、一さかり子供のことで話がはずんだ。「東さん、子供は達いくつといくつだい」

「今度Kが尋ねる。」

「上の子は四つで、下の子は二つだ。下の子が生れて十八日目、應召したんだよ」

「それは大變だつたね。でも男二人で楽しんだ。僕にも二人あるけど、女ばかりでつまらないよ。ほーらね。」

ポケットから寫眞をとり出して見せる。

「もう大きいんだね」

「僕の年ではあんたに負けたが、子供の年では僕が勝つたと云ふわけだね」

と云つて、嬉しさに顔をくずして笑つた。

お互に子供の話しが一番楽しい。

「二人とも子供があつて、いゝなあ。Hなんか女ばかりでつまらないと云ふが、勿體ないことを云ふなよ。僕のとこなんか一人だつて生れはしない。」

Kが口惜しさうに口を入れた。戦地ではたまち親しくなつてしまふ。殊に、この病院の兵隊は私の部隊と同じく九州の兵隊ばかりなので、こんな戯談をすぐ云ひかはすやうになつた。

あんまり賑やかなので、傾向ふの患者まで

こちらを見てゐる。

「Mさん、大部元氣になつてきたね」

Hがふりかへつて言葉をかけた。

「おかげさまで」

と答へたが、頬がおちてゐて、言葉に元氣がない。枕もとに、ペラチブスの疑ひ H部隊本部 歩上等兵Mと書かれた紙片がはつてある。私と同じ部隊だ。

「附添ひの人もう歸していゝよ」

Kが元氣づけるやうに、はずんだ聲で言つた。

白いガウンを着て看病してゐる若い兵は、Mさんの義弟ださうだ。近しい人に看てもらへるMさんが羨ましく思はれる。枕頭には水飴の罐や果物の罐詰が、雑然と轉ろがつてゐる。

午後になつたら、また熱が相當に出たらしく、頭がぼんやりして、氣持が悪い。三時にK衛生兵がMさんと二人にくず湯を作つてきてくれた。

砂糖が存分に使つてあつて、とても美味しい。

「粥汁ばかりだから腹がへるだらう。くず湯は毎日作つてあげるが、水飴もそのうち藥室からもらつて來てあげるよ」

くず湯や水飴が戦地で食べられるとは、豫期だにしまかつたことだ。涙の出るやうに、Kの言葉が有難く聞える。

衛生兵も附添ひの兵も去つて、二人きりになつたら、Mさんが珍らしく言葉をかけた。

いろんなことを話し合つてゐるうちに、Mさんの郷里が私の生れた町から二里ばかり離れたM村だと判つて、急に親しくなつた。Mさんは十九日に入院したさうだが、その時はかなりの重態で、擔架でかつぎこまれ、直ちに食鹽注射を二本もうつたさうだ。

「全く死ぬところでしたよ」と淋しく笑つたが、今では大變よくなつたらしい。

然し便所にはまだ行けなくて、支那の民家

から搬送してきたらしい大きな瓶に流しこんでゐる。

私も四十度以上の高熱が既に十日餘りも續いてゐるので、衰弱しきつてゐるが、便所だけはそれでも獨りで行ける。Mさんにくらぶれば病態が軽いのかもしれないが、人に迷惑をかけまいと一精一ばいに頑張つてゐる爲でもあらう。

便所は中庭を隔てた他の病棟の向ふにあるので、衰弱した病人にはやゝ遠すぎる。歸つてくると、くずおれるやうに毛布にくるまるが、暫くは動悸が高くうつてゐる。その上、身體が冷えるためか、尿意は頻りに動くので、身體のやすまる間がない。

たゞ弦のやうにピンと張つた氣が夢遊病者の如く歩かせるに過ぎない。

苦しみは次第に深まつて、漣しがないやうに思はれる。

入信
實話

亡き父母の愛

小宮 繁 八

一體私の過去は信仰に付て全く
零であつた。

その重なる理由は何故に神佛
を信仰すべきか、信仰せば如何
なる真理があつて人々に利益を
授けらるゝか等の命題に對し具
體的解釋を得ることが出来な
かつた事と、今一つは何不自由な
くこの世に育ち、成人してから
も何の不幸にも遭遇せず、餘り
に順調過ぎた爲め更に信仰心等
起らなかつたのである。そして
奔放自由に振舞過ぎたその結果
頭の使ひ過ぎと長年に渡る疲勞
のため、三年前四十五歳にして

突如腦溢血に襲はれ、一切の事
業を放棄して

只管療養せざ
るべからざる
境遇に落ち込
んだものであ
る。

その療養に
はあらゆる努
力を拂つたが却々恢復するに至
らず、熟々人生なるものを考へ
る様になつて來た。



偶々或日野外にスケッチに出
掛けた時の事である。青芝生の
上に仰臥して瞑想にふけつた事

がある。

その時、自分の不遇をかこち
ながら亡き父母を想ひ出した。
今自分が半身不隨の身となつて
ゐることを誰が何が一番心配し
て呉れてゐるだらうか。

ア、それは亡き父母である。

一寸した腹痛に
も寢食を忘れて心
配し看護して呉れ
た両親である。今
は佛となつてゐる
両親は彼の世で子
の……自分の病氣
をどれ程心配して

みて呉れるだらうか、自分の病
氣全快を希願するものは自分の
両親以外に熾烈なるものは恐ら
く、他にはないであらう、と今
は亡き父母を想ひ親の洪大無邊
なる愛に浸る想をした。

あゝこの時私の信仰心は突然
として開眼したのである。オ、
さうだ、この両親の愛に頼らう。
と、スケッチもやらすこく、
歸宅して佛間に入り、祖先に香
をたいて合掌し、只管病氣全快
の祈願をしたものである。

亡き両親は今佛となつてゐ
て、阿彌陀様の身近に只管仕へ
る佛である。この佛にすがらん
とする私の心境は今や全く熟し
て、佛の利益に浸ることが出来
る様になつたと同時に、身體の
工合も漸次恢復して常態にかへ
ることを確信出来る様になつ
て、全くの絶望から希望の目を
送ることが出来る様になつた。
之全く親の……佛の利益であ
ると確信してゐる。更にこの兩
親の佛力を育み賜ふ大御親たる
阿彌陀様に合掌する。



奇蹟の石

衆議院議員

三 木 武 夫

これは實話である。

地名も寺名もふせておくが、去る田舎の大寺の話である。その寺には大昔或る高德の僧が龍を封じてゐたと云ふ傳説の池があつて、その池のはたにある大石を動かすと大雨忽ちに到ると云ふ言ひ傳へがあつた。昔から旱魃の時には屢々あらたかな靈驗を垂たもうたさうである。

ところが今年は關西地方は稀有の旱魃であつた。その寺のある村もおかげでえらい難儀をした。村の衆は密々相談したが如何ともこの自然の我儘に對抗する手段がない。そこで

古老達の發案で「〇〇寺の池の石を動かして貰ふべエ」と云ふことになつた。結果人力では如何とも爲し得ないから神佛の力に頼らうと苦しい時の神頼みである。

そこで〇〇寺の和尚に村の主だつた人々が膝詰めの談判をした。が、和尚と云ふのが、二三年前に東京の去る宗教大學を出て、亡父の名跡を繼いだばかりの若い僧侶であつたがこの村の衆の申出にははたと當惑した。

勿論東京の最高學府に學んだだけあつて、新智識は澤山仕込んであり、宗教教學には通じておるかも知れないが、またそれだけに、

自分の寺の傳説などを村の衆と同じ様に信ぜずみしてゐない。和尚の考へによれば、池の石を動かせば雨が降るなぞと云ふのは迷信である。第一どんな高僧か知らぬが龍を封じ込むなぞとは荒唐無稽である。龍と云ふものは支那人の考へ出した空想的動物であつて實在しておらぬ。實在しておらぬものを封じ込むのもおかしいが、その實在しない龍が石を動かしただけで雨を呼ぶとは尙更理屈に合はない。

然しかう自分の考へ通りを述べて斷つてしまへば身も蓋もないどころが、明日から寺におれなくなつてしまふかも知れない。

そこで色々と辭を設けて奇跡の石を動かすことを村人に斷念させやうとしたが、一方もまた大仰に云へば生死の土端場に立つてゐて、施す術がなくなつたの上での神だのみであるから、いつかな後へは引かない。石を動かす位ひは譯の無い話ではないか、澤庵石程の大きさもないものだから、和尚さんが駄目だと云ふなら俺達で動かす。いや、厭と云ふ



故白木俊二郎君撮

勤勞奉仕

のではないが、まだ修行も足らぬ拙僧の如き誰僧がやつて果して効を顯すかどうかは疑問である。まあもう暫く天氣模様を見てからにしてはどうであらうか、うんにや、それ程の餘裕があつたら何もこんな頼みにはやつて来ぬ、切端つまつてのことだから是非石を動かしてくれ、修業が足らぬと云ふが、大學まで行つて何を勉強して来たかといふ強談判で遂に斷る術もつき果てゝ到々承諾を與へてしまった。では早速やつて貰ひませうと云ふので村人が大勢寺へ集つて来て、御本尊様の前だとか、池の廻



九死に一生を得

大津陸軍病院 田中 秀一

二ヶ年の聖戦に参加致しまして不幸凱旋の直前に病にたはれ、戦地に於て手術を受け九死に一生を得て内還の命を受け、以來白衣の身となつて陸軍病院に勉めてゐました折柄、病状はかばかしからず、半ヶ年の病中精神的に非常に生命の不安に陥り、堪へ難いその日を送つてゐました所、ふと「浄土」と云ふ月おくれの七、八月號を病院に發見、繰いて見ました。これが本日幸福のこの手紙となつて現れやうとは夢ならず、九月、十月號をさがし求めましていよく信仰によりて安心立命を見出すことが出来まして全く精神的に九死に一生を得る事が出来しました。もとより微かながらも十年程以前から宇宙には何物か存在するものと

り、例の奇蹟の石の近所でしきりに拜み始めた。若い和尚さんも觀念の脚を固めた。

自分には全然自信がない。天氣模様を見たところが、からりと晴れ上つてゐて當分雨が降りそうにな景色はない。石を動かして雨が降らなくても自分に罪はない筈だが、何百年間その地方の信仰の對象であつたその寺の威信と云ふものはこれで一ぺんに地に墮ちてしまふだらう。御本尊様には勿論、御先祖に對しても申譯がない。然し、事ここに至つては乗るかそれかやつて見るより外に工風はない。そこで和尚さんは先づ本堂で御本尊様にお經をあげることにした。なるだけ儀式を莊嚴にして長引かせてゐる中にはどうにか名案が浮んで來るか、または何か突發事件が起つて情勢がどてんとひっくり返るかも知れない。奇蹟を信じない筈の和尚さんが、遂に奇蹟を頼むやうな有様になつてしまつた。

こんな工合にお經をあげてゐる中に、不思議なことに段々と空模様が變つて來た。青空にうす雲が出て來たと思つてゐる中に、それが次第に濃くなつて、しまひには雨氣を帶た風さへ吹き始めた。和尚さんの長いお經が終つた時分には、先程までの好天氣はどこへやら、すつかり雨模様になつてゐる。村人は喜んだが、和尚さんはおどろいた。和尚さんの前に本當の奇蹟が顯れたのである。若い和尚さんにとつてこれ程有難いことはなかつた。然しまだ信じてゐる譯ではない。氣まぐれなお天氣はまた切角の雨雲を吹きとばしてしまふかもしれない。空頼みで當てにはならぬい。が、先づ雨の降りそうな條件はすつかり備はつた。稍々安心して石を動かせる。そこで和尚さんは出來るだけ緩りとして足どりで本堂を出て池の方へ歩いて行つた。空を見るところとしても今にも一降り來そうである。次第に自信を得て來た和尚さんは靜かに傳説の石に近附いた。毎日青空ばかり映してゐた古池の面は今では雨雲を映して物凄じばかりに靜まりかへつてゐる。

和尚さんは靜かに石の上に手を置いた。

その時、沛然として豪雨があつた。

ぐらひの想像で感謝の生活を續けて來たのですが、戰地生活二ケ年に於て甚だしく心境の變化を起し、かてゝ加へて白衣の生活半ケ年……精神的不安に堪へ難い病中の小生を中村辨康先生の微に入り細をうがつ日常勤行式解説に依つて心の底から念佛を稱へ奉ることが出來得、こゝに於て初めて小生の將來の指針もハッキリと致して來たやうに思へます。確固たる信念より出發した信仰は必ずや如來様の御加護を受けて安樂往生を致す事と存じます。小生同様のめぐみと與へ下さるゝ事と存じまして差當り左記住所氏名宛御送本下さいますれば難有く存じます。(後略)

○前略本日は「淨土」を御寄贈下さいました。御厚志有難く存じます。現今小生の精神上の更生と共に具さに人間味を考慮致すやうになり感謝の念の中に南無に歸依し如來様の御慈悲を相受け、いよいよ生を受ける身の責任重大なるを覺へつゝあります。先は取りあへず御厚禮にかへまして。

梅若實翁の修行逸話

松 本 龜 松

梅若實翁は後年こそ、明治能樂界の三名人に中に加へられ、藝術の妙境に遊んだが、若年の頃には自分自身の残念に思ふ程の聲量しか持たさず、それを能役者としての一人前にまで直すには、一通りでない苦心と努力をしたのであつた。以下の話は實翁の後年自身の履歷を、詳細に書残した中に、當時の苦心のあとを思起して書いたものに據つたのであるが、その涙ぐましい努力には、世の多くの人に教へるところが多いと思はれる。

○

實翁は元來梅若家に生れた人ではない。輪王寺の御金御用達、鯨井平右衛門を父に持ち神田銀町で文政十一年に生れた。九歳の時ある事情から觀世座の名家、梅若家の養嗣子となり、十二歳には家督相續をしてゐる。

ところで、實翁は幼年の頃から、身體は相當肥つてゐたが、

聲量は如何にも弱小であつた。能役者の家を襲いだ以上、諸曲を誦ふ事は表看板の一つだから、どうしても立派に誦はなければならぬ。併し、生來の弱小では強大な張りのあるものに直す事は出來さうにもなかつた。といつて、名家の當主ともなれば幼年でも御城の御用を勤める事は、豫定せねばならない。斯うした事情で當の實翁も子供ながら苦勞をしたし、直接藝の指導に當つてゐた梅若近右衛門——梅若家の分家で、後に文叟——も、隨分骨を折つたらしい。だが持前の聲量はそのまゝで十七八歳になつてしまつた。

子供のうちこそ仕方がないと思つてゐた同役の人々も、斯うなると實翁の前途に見通しをつけて、モウ物にはならぬといひ出す人が出て來たので、自然さうした聲が實翁の耳に入る事も屢々あつた。當時の能役者には所謂ラツブ根性といふ、卑屈な

氣持を持つてゐた。實翁も名家を襲いだのでなかつたら、それ程までにいはれなかつたのかも知れぬが、ある種の反抗的な氣分も手傳つて、蔭口は輪に輪をかけた。その頃實翁は六之丞といつてゐたがその蔭口の中には

六之丞の聲は水風呂桶に入蓋をして、屁をするやうだといふ極端なものさへあつた。實翁の口惜さは察するに餘りある。後天的なものなら、直す事も出来ようが、先天的なものだけにどうにもならない。併し、どうにもならない事を承知しながらも、服藥もした、人のよいといふ事は何でもやつた。苦しむ時の神だのみで神佛の加護を祈念した事もあつた。だが別段の功職もないので、悪口をいはるまゝに過すより仕方がなかつた。

○

そのうち二十歳を迎へた。一二年すると、同年輩の人々は追御城御興詰御用を仰付けられる事となつたが、實翁にはその沙汰がない。一體、御城へ詰める能役者は御興詰とならないと、一人前の扱かひはうけられなかつたから、誰もその沙汰を待つのが常であつた。是は何故かといふと、將軍家の御相手が出来るので、待望のものだつた。

實翁は自分の家は觀世座に於ける、たゞの弟子家ではない。昔は丹波に於いて太夫と稱したし、現在でも一役を仰付けられ

る家柄であるのに、相當な年齢に達したものを、その沙汰がないのは、自分の懸懸が原因なのか。師家で推舉しない事は、心中面白からず思ふと同時に、なさけなくなつた。

斯んな事で懊惱の日が續いた。するとある日、御本丸御小姓、荒尾土佐守からの内意で

六之丞の謠は將軍家に少しも、御聞取御座なく、餘り小言なり、

との御沙汰があつた。

この時の實翁の驚きは一通りではない。同役の蔭口位はたゞ口惜しいでも済むが、事將軍家からの御沙汰では、家にもかゝる事なので、如何にすべきかに當惑した。そして、その當惑が實翁を一生懸念にしたのである。流石に後年明治維新によつて、全く瓦解した能樂道の再建を、一身で爲し遂げた程の人だけにその若さでも覺悟の程は、頗る確然としたものがあつた。當時、實翁は種々な事情から、本所松井町の裏屋住ひに、廿八文の髪結錢にも困る程で、生活にも恵まれなかつたが、そんな事よりは當面の大問題の解決のため、本所一ツ目の江島辨才天に大願をかけ、

餘事はさておき、たゞ／＼自分の音聲が人並になりますやうに、その善い悪いなどは申しません。願はくは將軍様に自分の謠が通りますやうに

とだけ祈念をして、百日間を限り日参をばじめた。

萬一よんどころない事があつて、一日参詣の出来ない場合には、その翌日から改めて百日間日参する事は、最初からの覺悟であつたが、御役はあり、人の交際はあり、而も不便な當時であつたから、社殿に着くとそれが夜の九ツ刻、現在の十二時を過ぎて居るので、是は翌日の分になるといつた事が屢々あつた。九十七日まで續け、モウ二三日と樂しみにしてゐた時、やはり支障があつて、時を過ぎた爲、また改めねばならなくなつた事もある。この時の事を

今日の分にならず、誠實覺念を極む、能々愚案仕るに、是全く神の御試しと心付き、猶一心を剛み

と書いてゐるが、實に眞剣な氣持がよく出てゐる。

斯うして満願の日まで、凡そ三百日を要して、百日間の日参を了した。勿論、この間隆の鍛錬も怠らなかつた。而も、人には出来得ざる内事捨身の行を、三百日間滞りなく成就した。

この内事捨身の行とは何をさすものか實翁は

是は認むるに憚りありて不書

と書いてあるから、或は禁慾といった事ではないかと思ふが、兎も角、非常な精進と努力を斷行したのであつた。

○

この眞剣な氣持が神に通じたと實翁は最後まで信じてゐた

が、満願の頃から不思議と聲が出はじめ、他からも褒められるようになった。實翁は歡喜した。斯んな事は前代未聞である。何とも有がたい事だと後年令息萬三郎六郎兩氏にも話したさうだが、嬉しかつたに違ひない。そして、實翁のえらいところは、是で止めてしまはずに、愈々勉勵する事で、更に一二年の修業を續けた。

すると二十四歳の秋、觀世家へ六之函を御奥詰と致すようにとの内沙汰があつた。是で裏店住居も出来なくなつたから、下谷御徒町に轉住したのであるが、何にしても、この三四年間の努力は遂に報ひられたのである。實翁が愈々歡喜したのはいふまでもないが、それよりも幼事から指導に當つてゐた、梅若近右衛門の喜びはたとへ様もなかつた。是で本家も安泰だといつて、泣いたさうである。

實翁が後年大成したのも、要は斯の三四年間の努力が然らしめたものといへよう。

○

この話は嘉永四年の事であつたが、その後明治維新の瓦解にあひ、更に能樂興隆への再建に努力し、永年の願案であつた舞臺も、装束も一通り出来、明治九年以來、畏くも天覽能を數回勤め、いはゞ功成り名遂げた状態におかれた明治十九年、實翁は斯の昔の大願に對する御禮心から、一ツ目の辨財天社に能樂

の奉納をした。

日は十一月十四日で、演奏曲は先代觀世鐵之丞氏が舞囃子「江島」、實翁が能「葵上」、養子梅若六郎(後の觀世清之)氏が能「猊々」であつた。

斯うした事から察するに、實翁は常に感謝の生活が續けられた人の様に考へられ、一入奥床しさを感ずるのである。

梅若家は名家にはちがいないが、徳川時代に四座一流が確定してからは、家元制度が判然りして、たとへ客分であつても、家元と同格ではなかつたから、自宅の舞臺に各流の家元全部が出勤してくれるやうな事は、絶対にあり得ない。然るにさうした事實が後年は何回かあつた。それは時世が然らしめたには違ひないが、自分を知る實翁は斯う考へず、常に有難い事といつてゐる。斯うしたところに辨財天社の奉納能も出發するのだと、私は考へてゐる。

○

ところで、まだこの話には後日話が残つてゐる。といふのは、現在筆曲の大家として有名な、今井國松氏がこの實翁の難行修行によつて、大願成就をした事を聞傳へ、實翁に面會をもとめて、その話を直接きき、且つ修行の方法傳授を乞ふてゐるのである。

是は明治三十三年の春の事で、ある一日今井氏は藏前に實翁を訪ねた。

今井氏は當時岩崎彌之助氏邸に權古のため出入して居り、實翁も岩崎氏を弟子にとつてゐたので、その關係から紹介されたものではないかと想像される。實翁と今井氏の對面はこの時がはじめてであつた。

實翁は門はれるまゝに、當時を思ひ出して懇切に説明した後、

人々の心々で修行の方法も異なるだらうし一概にはいへぬが、大願は二心を貫くといふ事だけは同じです。従つて自分の行つたところを、そのまゝなさるより、年齢や境遇によつて、その人らしい行をなさるのがよいと思ひます。

と話した。この時今井氏は三十歳であり、實翁は七十二歳であつた。

老名人の至言は頗る簡單ではあるが、味へば多くの含義があるのに敬服させられる。

今井氏が今日の地位に置かれる事を、實翁は見ぬいたかどうか分らな、面白い話だと思ふ。(十四、十一、十)

信 行 道 場

て れ 訪 を



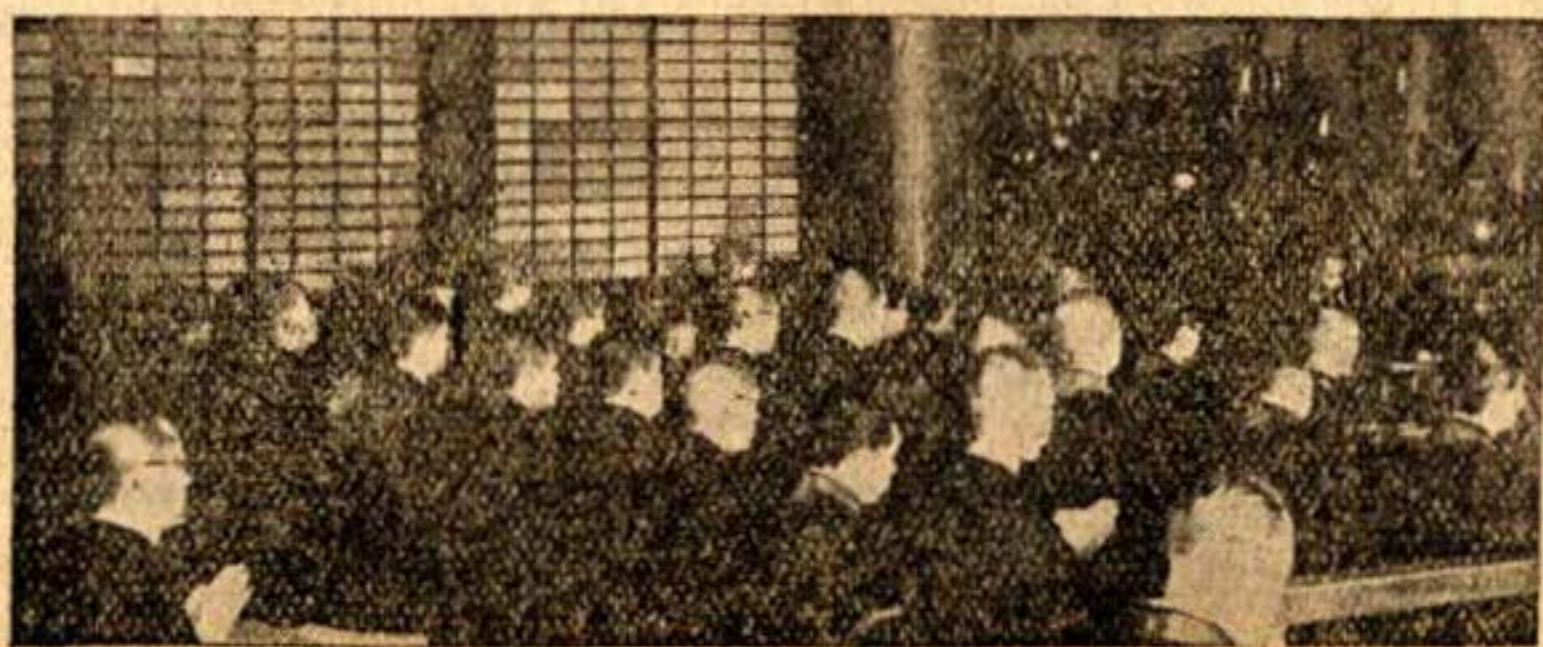
薄曇りの朝まだき、奥澤九品佛淨眞寺に信行道場を訪れる。それは、大學や専門學校を出た淨土宗の若い新進氣鋭の青年僧達が、時局下のあはたゞしい風雲の中に、飛躍日本の

將來に對處して、眞の國民の指導者たるに相應はしい人格完成の爲に、三ヶ月の間此處に籠つて信行を策勵する處である。

ここ九品佛淨眞に降り立つと、初秋の武蔵野の匂ひも眼に沁みるやうだ。所々に櫻樹も交へた松並木。その途中木下蔭に並ぶ、幾基かの地藏像、それには小石が澤山のせてあり、亦た傍の庚申様には八歳女等と書いた白紙に生米を載せて供へてある等、いかさま郊外らしい俗信的慣習がまだ見受けられる。その隣びた參道を過ぎ、般舟場と標額された表門に來ると、懷しや、信行道場の立看板。こゝに九月十五日から十月十日迄三ヶ月に亘る聖行にいそしむ佛子らがいますのだ。右手には此の寺からも幾人かのその中には見知越しの人も交る若い僧達の出征者の名が見える。記者はやゝ佇立した後境内に進んだ。右手に閻魔堂を見乍らゆくと正面が開山堂、右手の建物が、信行道場として用ひられてゐる講堂である。今は講義中であらうか、森とした閑けさだ。まづ久し振りに訪れた此の淨刹を隈なく

一巡しよう。開山は有名な珂碩上人である。徳川以前には吉良家の城郭にと目論まれた

といふ此の土地を選んだ珂碩上人が自ら三萬六千の御像を彫みつけた九品淨土のみ佛達を護持し、三佛堂に安置して此のみ寺をひらかれたといふ。それに因んのか、門前



の松並木の木の数は元は三千六百本、開山堂と三佛堂とからの本堂への距離は三十六間、本堂の柱数は三十六本だといふ。珂碩上人は今日でも在俗の信者を數多く有つ。上人像が時々近郷の在家から在家へと出開帳に巡廻すると近廻りの信者達は各々それにお米を供養する。それで寺の維持の助けとするのである。

彫刻師の家に生れたといふ上人がかくも尊き結縁の路を通じて淨土の尊信を人々に植ゑつけるに至つた深い内的經路と人々の崇仰の集つた深い理由とを記者は詳らかにしないが、此の方の生涯には恐らく我々の測知らぬ信仰體驗が秘められてゐることであらう。開山堂から歩を左に轉ずると右手に大悲閣なる小堂宇左手に立派な三門、三門

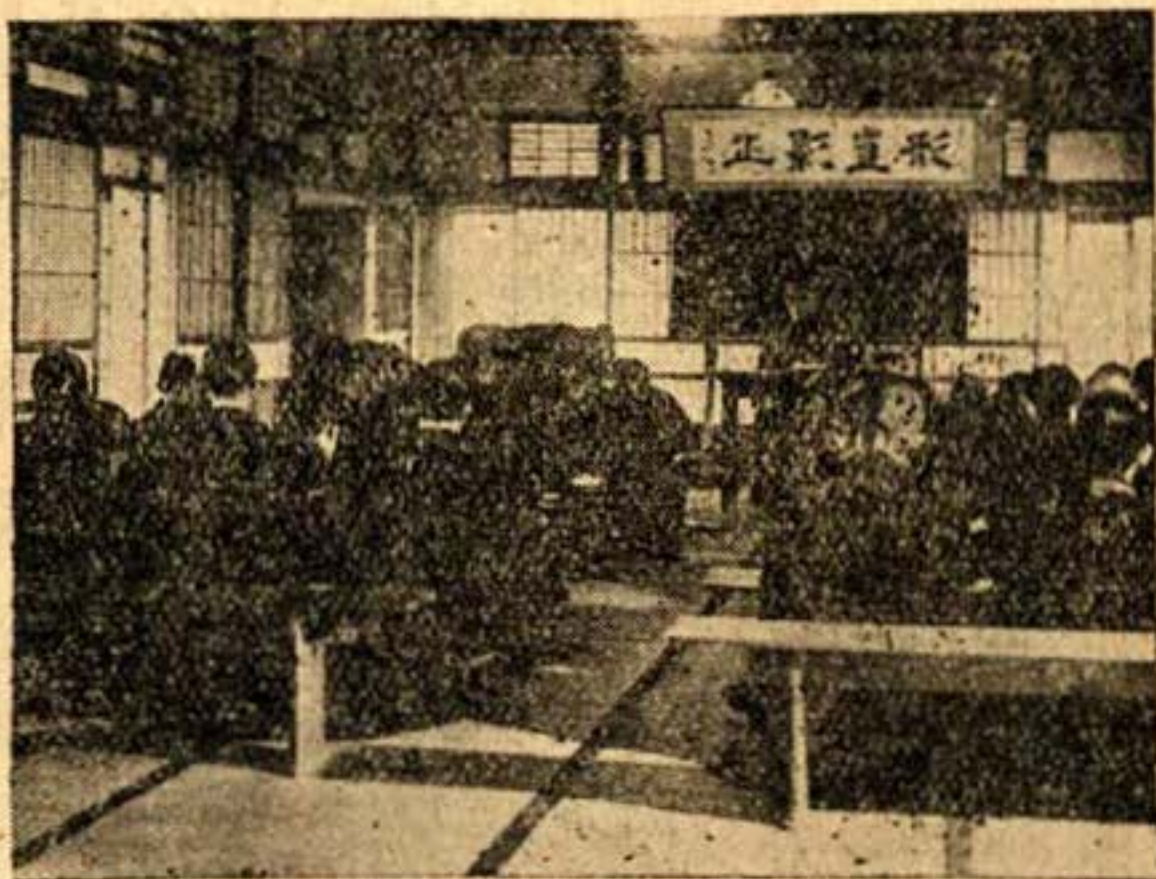


を経て上に上ると左手に鐘樓堂、右手に本堂龍護殿がある。本堂前には廣場を挟んで三佛堂が中央上品、向つて右手中品、左手下品三佛堂と同様に並んでゐる。小門を過ぎて廣い墓地に入る。幾人かの英靈中には友田伍長の名も見える。つつしんで參詣し、裏手に廻ると崖下の九品佛池では若い人達がボートを漕ぎ廻つて秋の日ざしを楽しんでゐる。再び戻つて刺を通ずる。所長である本會理事長中村辨康先生がにこやかな慈顔に迎へて下さる。讀者熟知の藤井實應、金田明進兩先生が指導員としてやはり常在し起居を共にしてゐら



れる。其他住職の清水觀禪師、教總主任の陸軍少尉水上秀俊師等、何れも和やかに應接して下さる。日課を伺ふと、午前五時起床、同半勤行、六時二十分湯桶作業、七時朝食、八時より十一時講義、十一時念佛及禮拜、正午晝食、午後一時より三時傳道及法式實習、三時教總講壇、五時夕食、入浴、六時勤行、七時より自習、座談等九時點檢、九時半就床消燈であるといふ。

ふ。充實した一日、小休なき修養、そこにこそ昭和維新の指導者たる氣魄も生じて來やう。講義にしても世間では代議士龍正大學長文政博士である樫尾辨國先生の如きここでは學業と共に食事し念佛されるといふ。厭



でも大學の課程丈ではなく、僧堂教育を重んじてゐるが、眞に不惜身命底の僧侶たるには斯様な信行中心の修養が必要であらう。伺へば信行道場は先づ一切の俗念を捨離する目的で若干日の別時行儀に始まつたといふ。寔に大衆が空念佛の徒として終らざるが爲には、別時念佛に依て此の信仰を増進すべきであら

う。かくて金剛不壞の信根を増進せる時、眞に時局を突破すべき力が湧出するであらう。一兩日中に全員内原訓練所に赴いて一週間の訓練を履むといふのも、同じ念處に出でやう。さればこそ、此の道場が各宗初め文部内務等の人々にまで注目されてゐるといふのも道理である。記者も此の淨刹に籠つて修行される四十餘名の聖衆を貫いと見た。皆眞面目にやつて居ます」と中村先生は言ふ。管長の直命で選ばれた宗教戰士のその眞鍮な授業振りに記者も合掌して表に出た。そして所用で果せなかつた一日の行事を悉く共にする機会を後日亦た得たいと念つたことである。

武蔵野の秋は動いてゐる。晴々と力強く大地は胎動を續けてゐる。赫黒い土のこぼれを手にとつて、記者はなつかしんだ。これこそ新しい日本の匂ひ、新しい日本の宗教を培む匂ひだ。私は、私分の若い學生時代を振り返つてみた。幾度か武蔵野を歩

いたことである。或時は自然への憧憬れ心を以て、また或時は宗教的聖蹟への愛慕の心を以て、幾度か友らとまた獨りして、歩いたことである。その頃は今のやうな乗物の傳のない、この九品淨土の聖域へも訪れたこともある。けれども斯る機會には恵まれなかつた。私は今嗅いだ土の匂ひの泌みる掌を合せて心秘かに若き比丘達の多幸を拜むたことであつた。

(寫眞説明—掲載順に、別時念佛、勤行、食作法、行道、講義、禮讃)





中支遺遺岩松部隊 時 岡 秀 雄

草いきれする地に伏せば弾丸うなる男兒ぞ我れは雄々しく死なん

群一彈丸雨下のもとにあつて、日本男兒の氣魄を高揚した實感のにじむ作品である。

栃木 大 輪 清

菊摘める母の脊に日の溜く射し百舌高く啼く山の一つ家

群一のどかな山家の家の風物が菊の花を折る老母を焦點として清らかに現はれてゐる。

大阪市 水 連 ヒ サ

戦傷に脊子のなやむとききしより天かけりゆく羽欲しと思ふ

群一戦ひに傷つた良人の報を受けて遠くより氣をなやませる心はかなくもあらう、天かけりゆく羽欲しと思ふの句に引締つた緊張の度が感じられる。

和歌山縣 松 尾 察 道

新米を炊きて夫を待ちにけり西に傾く三日月のもと

朝鮮 鐵 江 八 年 坊

秋の日の光は空を満しけり君が遺骨のかへり来る日を

堺市 笠井 松 枝

君のため馬も我が子も召され征き銃後を守る老いし父はも

小樽市 中村 も ん

吹雪する夜は佗びしけれ戦線の子ら思ひつつ毛糸編むなり

靜岡縣 一向 山 人

つはものは恙もなしと言ひ越しぬ菊花の匂ふ明治節の日

滿洲開原 八 木 茂

移り來て初めて知りぬ大陸の寒に稲穂の凍りてぞ立つ

徳島縣 丸 月 長 壽

秋の山越路の原の頂きに望めば海のしづかなるかな

大阪市 川 崎 孝 道

やせ犬や御前も父母はないのかと吾が手のパンを裂きてやるなり

福島縣 三 浦 鶴 子

柿の實は澁し故郷の秋の實の戀しとよこすつはものの文

大阪 渡邊 眞 行

大君に捧げまつりしはらからの血しほぞ赤く永久に

長野縣 宮 澤 榮 子

ありあけの月の光の澄み渡る庭掃き居れば朝詣で來ぬ

香川縣 荒 木 は ち

はかなきは人の命と思ほへど今宵照る月かげさやかなり

大津市 田 中 秀 一

二とせのいくさの後に白衣著て故國にかへる我れを寂しむ

東京 奥 山 政

秋たけて身の怠りをしじみと責むるが如くこほろぎの啼く

北海道 花 田 順 往

奥支那の冬の戦ひ如何ならんみいくさ人の幸いのるなり

東京 小 泉 妙 春

み佛の光りの道にてらす時わが行ひのはづかしきかな

佐賀縣 軍 人 養 養 所 宮 本 廣 吉

常に臥す病のひまのつれづれに土をつくねて人を造りぬ

新宮市 奥 村 映 水

豐作の菟蓐芋と柿賣りて軍事公債買へる樂しさ

聖戰の勇士は野べに山に立ちこの名月に故國しのばん

京都市 千 賀 國

ありし日を語る親子は寫しゑに物問ひかけてなぐさめとする

小樽市 平 井 善 慈

湯濯して髪とき揃へ手を組みて珠數かけ唱ふ彌陀佛の御名

滋賀縣 美 船 波 路

たぐひなき純情の子の今ははや彌陀の都へ旅をいそぎぬ

愛し娘の逝きしを憶みて

井のごとく心の底を掘り下げてまことのわれを見つる樂しさ

小樽市 水 室 眞 子

身を以つて世に示したる國の華、眞の道を永久に傳へぬ

京都市 水 田 七 郎

病みぬれば山々戀し思出の寫眞を探すひき出しのなか

東京 三 野 輪 幸 節

この宵も爆音高くとどろきて由々しき事の近きかと思ふ

京都 西 島 春 人

投稿規定

官製はがきに一回二首以内とし、「浄土」編輯部歌壇係あて送ること。

佛

の

慈

悲

元文部大臣

鳩山 一郎

— 佛 — 慈 悲

今日この時局を指して人々は「容易ならざる時局」とか「未曾有の時局」とか云ふ言葉を使つて説明しておるが、それらの言葉は既に餘りに使はれすぎて感銘がうすくなつてゐる。私は寧ろこの時局を「暴風雨の時局」であると云ひ度い。しかもこの「暴風雨」は大風一過すれば後には晴天が來ると云ふやうな一時的なものでは決してない。次には何が顯れて來るか、何人もそれを豫斷することが出來ないと云ふ意味の非常に險惡な暴風雨の時局であると思ふのである。

また國內の問題にしても支那事變が何時終るのか、どう解決するのかと云ふことは政府の人々にもよくは解つておらないのではないかと思ふやうな有様である。例へば低物價政策を唱へて、物價引上禁止令と云ふやうなもので物價釘付けと言ひ乍ら忽ち米を五圓値上げすると云ふ。このやうに次には何が出來るか誰れにも解らない時代である。

然し、私はこの時代に在いて次の二つのことが注目されると思ふ。即ち一は「獨善」と云ふことであり、二は「億兆一心」と云ふことである。この二つの對立するものがこの時代の特徵であるやうに思ふ。

歐洲に動亂が勃發したのも英國や獨逸の獨

征旅の
回心



安田 秀賢

(三) 宇品出港

十月三十日、午前九時、入隊。第一機關銃中隊、第六班へ配屬された。

中隊の被服を着用して、班内に入れば○役兵の諸君は大いに後備兵の我々を歓迎して呉れる。思へば今から九年前、京都兩洋中學四年修學中の十二月一日、現役兵として在隊した當時を偲び、バットに火を點じて新しい戰友と相語らうとした時、廊下で週番下士の大聲で

「今呼ぶ者は直に事務室に集合」

「ムムム。ムムム。安田秀賢。」

ハットした。班内の戰友の顔は切迫した瞳で私をみた。私はその瞳の色に戰地へ行くのだといふ豫感をもつた。各班内から走つて事務室へ行くもの、私もバットを吸數



一デ收回品廢

ざわざわに家丁御はれこはれこあま

しワすまり入れ恐

この時局に最も肝要なことは一億の國民が一心になることと云ふことである。

暴風雨の時には家の中の一人一人が家中の戸を押へて

善主義の結果である。獨善の國同志が衝突すると云ふことは誠に止むを得ない結果である。

わが國の現状に就いて考へて見ても、官僚獨善の弊と云ふことが國民の間に云はれてゐる。政治上のことにしても經濟上のことにしても獨善で行ふ限り、それは對手方の意志を考慮に入れておらないのであるから、そこに衝突があると云ふことは當然である。斯くの如きことではこの時局に最も必要であるところの「億兆一心」と云ふことは實現がおぼつかないのである。

おらなければ、その家は吹き飛ばされてしまふ。日本人がこの時局に一人一人の持場を忠實に守つておらなければ大變な混亂が起るであらう。

聖德太子は「和を以て尊しとす」と仰せられたが、今日こそこの言葉を最も良く實現しなければならぬ時なのである。そのためには「獨善」の行ひがあつては斷じてならないのである。

この「獨善」を排し、「一億一心」の實を擧げるためにはどうすればよいのか。

それは無我報恩の精神に徹底することである。即ち我を去つて佛の慈悲の心に歸すると云ふことがそれである。この佛の心を以て他の人の心にも押しすゝめ、日本全體が一つの心に纏ると云ふことが肝要である。

かくてこそ如何なる障害をも突破し得るのである。佛教徒たるもの大いに心すべき秋である。

十一月十四日小石川傳道會館創立十週年
記念會に於ける講演より——文責在筆者

入へ投じて事務室へゆくと、〇〇表を手にした木下准尉殿が直立不動の姿で集合員を見つめてゐる。

各員の人員點呼を終り、木下准尉殿はハリのある聲で

「命令、〇〇名は直ちに出勤準備すべし」それが終つて、各人に電報頼信紙が渡されて、

「出勤す、面會にきたれ」

全く夢のやうだ。今日の午前九時に入隊して、すぐに出勤準備だ。

どの戦友の顔を見ても、ギラギラと瞳が血走つて、武者ぶるひしてゐる者さへある。

事務室を出て、班内に歸つてくると、

「野戦ゆきの命令ですか」

「そうだ」

頭度、第六班からは〇名出勤だ。

中隊の被服係の〇長は戦時〇庫へゆき、戦時用の〇服全般をうけて、我々に支給される。戦友が夫れ夫れ軍裝整備をして呉れ



【傷病兵慰問行】

尊

い 頁

貞恭婦人會

渡邊榮子

立川陸軍病院の一室それは十一月四日の午後。
後。

「やあ!! 浄土つて、毎月送つて頂いてますよ。兵隊等が悦んでネ……來るとすぐに一生懸命讀んでいますよ。もう此頃はこちらの還送患者は内科疾患が多いので、自然長びく爲か退屈もするらしいんですよ。」

私共は直にそれが白衣の勇士に法味を捧げよと云ふ本部の企畫の現れである事を思ひ、急に浄土を通してもう十年の知己の様な親しさを感じる。それにこゝは嘗ても一度まだ事變の初つた許りの秋來た事が有つて、その頃は隊の方や北滿からの患者さん等三四十人ほどで、ラウドスピーカーの設備が今やつと出來

上りましたから一つ御挨拶を是非とのことに、そうした心構へ等全く無い私共すつかり戸惑ひして仕舞つた事が有つたので、なほ更のこと、「やつぱり此處はいつ來ても氣分のよい病院ネ」と領き合ひ乍ら熱いお茶の御接待を受ける。

「多くの一般の慰問者は傳染病室（無論そこはもはや何等危険のない状態にある）と聞いたばかりで、へえ!! と（手を振つて）あちらの一般の病室丈を見舞つて歸つてゆきますよ。だからこちらの患者達もすつかり諦めていますけどネ、それでも時々、他達の方に慰問がちつとも來ないんだな」と不平を云つていますよ」

る。あはたゞしいその夜も過ぎて、翌日は雨で雨天演習場で軍裝検査。

その翌早朝から出征兵士の家族がぞくぞく面會に押寄せる。

午前九時頃、村長と私の妻、六歳の長女がきた。

中隊裏の物乾場の石の上で最後のものごたりをしたが、お互に話題が見出せない。切實な感情をもつた時は本當に人間は言葉では現し切れないと思ふ。

午後一時頃になつて、いつまで會つてゐ



その特別室のベットに先づ一番先に十一月の號の淨土とオリムピックのミックスを一袋つつ差上げ乍らお見舞をする。

一般の御見舞に貰いても、花丈は全部こちらにまはして頂きますよと云はれた。其切花の菊がそここいつばいに咲き包ふ。

エキホスの湯せんが微に湯氣を立てゝいるのを視野の外に、事變後新たに増築された分室の方に歩を運ぶ。病棟の前にも中庭と云ふ様な所にも菊やダリヤが目にしむるばかり美しい。

こゝは多く内科疾患のもう快癒に近い方達と伺ひ乍ら各室をまわる。餘念ない紹興の手を休めて慰問を受けていられる方もある。軍屬として中支に往かれたと云ふ頸鬚の黒い方も居られる、五十三とかお歳を伺つて皆がびつくりする。同様な白衣姿の可愛い少年航空の兵隊さんもまじる。一寸氣付ない位軀の大きいこの十四五の兵隊さんは病氣になると「お母さん!!」なんて云ひ出すとか、ほゝえましいお話を伺ふ。

「近頃花作りだとか掃除だとか兎や鶏を飼つたりする仕事を患者自身にやらせています、かへつて非常に結果がよい様です。

しかし、犬でも、兎でも、鶏でも、いつの間にか病室へ連れていつてしまふのには閉口ですよ。」

各病室を廻り終つた私達を隔ひ乍ら、この應接の物なれた少尉殿はカラ／＼と打笑はれて、再び何やかやとお話を聞かせて下さる。

私の目に、コスモスが折から一層雲の深くなつた大氣の中にゆら／＼と咲き續いていたあたり、鶏小屋らしい建物の前でいつまでもかゝんでいた白衣の一人の兵隊さんの姿が思ひ浮ぶ。あの白衣の懷に同じ様な白いレグホンか何かを、しつかりと抱きしめて自分のベットまで連れて來てしまふ。そうしないではいられない氣持、生死の境を彷徨した歸還の兵隊さんの、迫る様な何か深い心のはためきを感じた。いつまでもいつまでも忘れ得ないであらう尊い頁がこうして又一枚加へられたのであつた。

でも仕方がないので、歸らせることにする。

村長はドンドン先に立つて營門を出る。

妻が營門を出て振り返つたその時の涙にぬれた顔。營内から一步も出られない私はその時の私の感情を筆にすることが出来ない。

十一月三日、午前八時。軍裝姿も晴れ晴れと進軍ラッパを吹奏しつゝ沿道の旗の波に送られて、〇〇驛へ。

軍用列車に乗る。

萬歳、萬歳。旗、どよめき、それは昭和十二年上海戰當時の出征のありさまはとも今の靜かな心地では言ひ現せない。讀者各位がその當時の感激を一番よくかみしめておいでになるでせう。

かくて私は、十一月四日、午前三時、廣島、宇品港から堂々と出船した。

行くは北支か、上海か、海の上には黒い雲がひくゝたれこめてゐた。(つゞく)



信 仰 實 話

芋を掘る

秋、さつま芋の出来るころ、島を作つてくれてゐる爺やに「芋を掘つてくれないか」と云ひます、爺やはいかにも惜しさうな顔をして「芋を掘るのはまだ早いですよ、芋づるの葉に霜降りる頃になつて掘るのがよろしい、まだ芋が育つ盛りですからなあ」といつて仲々掘つてくれさうもない。新芋はおいしいも

出入に禮す

金 田 明 進

のです、近所の子供たちが食へてゐる、八百屋が賣りに来る、他所から貰ふ。『自分の家の畑に作つてある芋だ、勝手に早くたべたい。』しかし爺やは芋は今育つ盛りだから掘つては可愛さうだといひます。

たかゞ芋の話ではありません。しかし、作り育てるものと、たゞ食へるだけのものとの間には氣持の上に大きなひらきがあります。もし爺やが、俺は雇はれ

てゐるものだ、主人のいふ通りになればよい、芋を掘れと云はれたら「はい掘りませう」と掘つてやればよいと、それだけの氣持ちなら特に考へるべきなものもないのです、それが、この爺やは自分の預つてゐる畑は、自分が耕し作り育てる責任がある。主人が何と云はうが、自分は作物の立場に立直つて云はねばならない、と思ひ込んでゐるらしい、いや若いときから農事

□□□□□□

十二光佛讃歌

□□□□□□□□

中島 圓信

一、無量光佛

限りあるかな現世は

亡ぶるなれどこの肉體

さあれ如來の慈光にあへば

すべては永遠に活かされる。

御名を稱へて 専心に

無量の光り 身に受けよ。

二、無邊光佛

十方法界すみ／＼も

佛の慈光行き渡る

六道迷ひの闇路まで

へだてをなさぬ御恩寵。

御名を稱へて 専心に

無邊の光り 身に受けよ

三、無礙光佛

いかなる障りあるとても

に専心從事して来たこの爺いや
は、さう信じきつてゐるらしい。
「爺や、お芋はいまに多になつ
て土穴へかこつて置くとくさつ
たりして粗末になるから、早く
掘つて、めづ

らしいう

ちに澤山

食べやう

じやないか」

といふと、「い

やまだまだ、

土穴へ蓋へて

おくのも、よ

く注意して穴

をつくりさへす

れば春になつてもお芋は腐りま

せんよ、」といつて仲々掘らない

のです。いや、爺やは芋を出来

るだけ育て肥らせたいのです。



たゞ消費するものの心と、そ
れを作り育て養ふものの心との
間には大きな距りがあるもので
す。

私は妻や子供にせがまれて、

爺やの留守

に芋畑に出

て、なれぬ

手に鋤をと

つて芋を掘

つて見た。

芋を掘るこ

とはむづか

しい、胴切

りの芋が多

くさん出

た、一うね掘つたら手に豆が出

きた、しかも、一番さびしかつ

たことは、爺やの云ふ通り、芋

がまだよく育つてゐなかつたこ

とです。中には大きいのも稀に
ありました。多きはこれから
もつと肥えやうといふ程度のも
のでした。かあいさうな気持ち
になりました、そして爺やのあ
の言葉が、みをいへのやうに思
ひ返されるのでした。

私の入浴

私は一人でお風呂に入つてゐ
るとき、女中や家の者が、「お加
減はどうですか」とたづねに來
たとき、いつも「ちようどいゝ
湯だよ、結構な湯だよ」といひ
ます。ぬるい時も熱い時も。他
所へ行つてお風呂をいたゞくと
きも、大がいはさう申します。
そしてぬるいときは、ゆつくり
暖まつて出ます。熱いときはジ
ツとこらへて入つて眞赤になつ

惑と業苦の 罪の子が
さうるものなき御光りに
苦しき去りて 救はれぬ。
御名を稱へて 専心に
無礙の光りを 身に受けよ。

四、無對光佛

比へものなきみ光りに

我等凡夫は 救はれて

法悦心にみち渡り

感謝の思ひ湧き出ずる。

御名を稱へて 専心に

無對の光り身に受けよ。

五、饒王光佛

思へ曠却無始以來

今日までの 罪障も、

彌陀の利劍が閃めけば

皆斬り掃ふぞ大悲願力

御名を稱へて 専心に

饒王光を 身に受けよ。

六、清淨光佛

不淨の身體もつ身とて、

たのを氣持ちよく存じます。風呂はぬるくても熱くても入りやうで有難く頂けるといふのが私の信念になりました。

これには多少由來があるので。私が小僧時代老師につかへて居りますとき、風呂では随分泣いたものです。長州風呂だったので、老師の入られると

き、湯の量も温度も丁度よい加減にして置かぬと大へんなのです。もし熱すぎたときは「なんでこんなにやたらに熱くしたのだ、薪が勿體ないではないか」と叱られました。ぬる過ぎたときは「早く燃せ燃せ」とせめられました。釜のまはりからあふれ水がポタポタ落ちて来て、

急げば急ぐほど火が燃え

つきませぬ。湯が多すぎ

ると又薪が多く費ると云

はれます。ことに、それ

が夜分であつたり、雨の

降る日であつたりする

と、たまらなくつらかつ

たものです。そして、老

師に風呂の加減をたづね

るときは、いつもオドオ

ドしてゐたものでした。

その小僧時代の氣持ちが未だに忘れられずして、私の上に大きな教訓となつて與へられて來ました。それは「ぬるい湯も、あつい湯も、よろこんで入れられるのだ」といふことでした。私はぬるい風呂にはゆつくり暖まるまで入ること、熱い風呂にはジツとこらへて小早く入ることをどこへ行つても實行してゐます。そしてもし「お加減いかにですか」と問はれると、「大へんけつこりです」と心から答へます。と同時に、あの嚴格だつた亡き老師の顔が、にこやかに眼に浮ぶのです。

しかし、あまり度をこえてぬるかつたり、熱かつたりする場合や、幼児等と入る時はこの限りではありません。

嘆くな、彌陀の御光に、

この身このまゝ我が六根、

穢身轉じて淨化さる。

御名を稱へて 専心に

清淨光を身に受けよ。

七、歡喜光佛

如來の大慈にあふ時は、

苦惱の子等は救はれて

法喜微妙に喚起して

明るく圓かになりぬべし。

御名を稱へて 専心に、

歡喜の光り 身に受けよ。

八、智慧光佛

貪・瞋・愚癡の罪人が

彌陀の慈光を仰ぐ時

愚鈍の身とぞ自覺して

至心に救済を求むなり。

御名を稱へて 専心に、

智慧の光りを身に受けよ。

九、不斷光佛

如來の慈顏を拜すれば、



かうして私はお風呂をいたゞくときに、わが小僧時代の辛苦をしのび、わが師の導きを有難く思ひ起すことの出来るのをうれしく思ひます。

出入に禮す

家へ入るときお辭儀をして入りませう。

家を出るときお辭儀をして出ませう。

と云ふと一寸妙に考へられませんが、わが家の出入りに禮をすることは誠に尊いことだと存じます。

先日、私は内原の満蒙開拓青少年義勇軍訓練所へ参りました。日輪兵舎に一日一夜泊めて頂きました。こゝでは誰でもこの兵舎の出入には必ず脱帽一禮

することになつてゐます。日輪兵舎は圓形の屋舎で、舎内中央に太い一本の支柱があつて、それを中心に屋舎の構造が極めて簡單に出来てゐます。六十人の手間があ

れば一日で出来て了ふといふ簡單さです。舎内は中央が圓い土間に

なつてゐて、その周りに環狀の床があり、

前後に出入口があつて、一舎に四五十人が收容されるやうになつてゐます。この簡單な家、云

はババラツクとまでもゆかぬ屋



舎も、これら義勇軍にとつては尊い魂の宿であり、勇む五體の安息所であり、満蒙開拓の根據地であればこそ、彼等はかりそめの出入りにも正しき一禮を捧

げるのであります。

わが國の古、われ

らの祖先も、簡單な

る家に住み、その家

の中ほどに爐を設け、

この爐を神

聖なるわが家の中心とし、わが

宿に聖なる想ひを寄せたとき

てゐます。

ましてわが家に神をまつり、

八萬四千の毫光は

彌陀は我を見給ふて、悲母が愛兒を恵むごとく、攝取の御手で抱きます。御名を稱へて専心に不斷の光り 身に受けよ。

十、難思光佛

如來の大悲は不可思議で

説く事知るもあははざる、

しかして賢者愚者とて

素直に歸依し頼むべし

御名を稱へて 専心に、

難思の光り 身に受けよ。

十一、無稱光佛

如來の慈光のその中に

われら安住する時は

靈感深く身に泌みて、

淨土に住す思ひあり

御名を稱へて 専心に、

無稱の光り身に受けよ。

十二、超日月光佛

八萬四千の毫光は

時局下信仰培養を兼ねて

「浄土」を年末年始の贈物に！

雑誌『浄土』を年末年始の贈物として御使ひ下さる數が年を追つて増して來まして何時も新年號發行後の御申込には品切の場合が多いので、布教用書として、纏めて御申込の分は成可く十二月十日迄に御通知下さる様御願申します。

新年號には管長院下の御法話を始め選り抜きの原稿を揃へて準備しております故時節柄信仰培養を兼ねて多數御注文下さい。(係)

佛をまつり、先祖をまつり、わが父母在まし、わが子起き臥すとあれば、どうしてその出入に禮なきを得ませうか。

私はかの兵舎にそれを學びたいと思ひます。

よろこびて出で、かへりて安み、樂しみて食し、和きて遊ぶわが家の尊さ。わが生活のすべて

を拜んで出入りするときいてゐます。

わが店に日に幾人のお客さまが來て買ひものをして下さるのとだらう。そのお客様等のおかげで生活が出来るのだ、この店の關をこれらお客様方の足あととして、それに感謝の念佛を捧げて拜むのだと申されます。

又ある同行は電話がかゝると、先づその相手方に黙し手を合せてから通話をすると思はれます。

みんな尊いことです。人格に接し風格に見えて拜むことは易いことですが、家を拜み、道具を拜み、品物を拜むといふことは出来にくいことです。せめて氣づかされた一つ一つでも實行してゆきたいと思ひます。

日月摩尼も影ひそめ
金山王の如くして

相好威神 極みなし。
御名を稱へて 専心に
超日月光を 身に受けよ。

陸海軍慰問「浄土」

寄附者芳名

(略敬稱)

名古屋市東區百人町

金 壹 圓 立花 正治

兵庫縣香住町一日市

金 拾 圓 願行 寺

朝鮮新義州府本町

金 五 圓 中川 九一

小樽市都通り

金壹圓參拾錢 平井 善慈

京都府綴喜郡普賢寺村

金 貳 圓 極樂 寺

同 極樂寺中

金 壹 圓 山本 倉造

布施市菱屋

金 參 圓 延命 寺

千葉縣房州

金 拾 圓 和田 正系



答 問 友 淨

阿彌陀佛の存在に就て

それは「淨き友の會」六月座談會の頃であつたらうか。初夏の風

も涼しく肌に渡る夜のこと、集う

人々も大方は散つて、僅かに橋

本、澤、大武、千葉等の六、七名

が居残つて尙ほ中村先生を中心に

種々の話を交してゐた。座中に若

い學生が一人居た。假にKとして

置かう。橋本女史や澤女史が盛ん

にK君をつゝいて何か問題を引出

さうとして居られる。

H「Kさん、先生の講話も回を

追つて段々深くなつて一寸初めて

の方にはとつゝきにくいでせう。

然し、こんな機會に一つ貴君方の

やうな若い方が宗教とか淨土教と

かに黙して抱いてゐる、何よりも

最初に知りたいと思ふ疑問を、遠

慮なしに出して下さいよ」

K「さう仰言られても困るんで

すが、一體念佛で南無阿彌陀佛と

唱へるのは、どういふ譯なのです

か」

O「誰でもが最初にきつと聴き

たがる問題ですね。此の會でもよ

く出たですね」

H「つまり、一番大切な點なの

ね。それが分つたら本物なのです

けれどもね」

S「お念佛はやつぱり唱へなく

ては分らないと思ひますけれど、

ませんしね」

H「一つ分り易く久々にお話し

ていたゞきませうよ」

中村先生「念佛は、いはゞあら

ゆる宗教に共通な祈禱形式の最も

純粹な高次の表現ともいふことが

出来るでせう。佛教の宗教的表現

の極致も、結局念佛になるのです

お釋迦様もその悟りの刹那に南無

佛と申されたと申します。

一體南無とは歸命、どうぞと拜

むことで、阿彌陀とは無量といふ

こと、アミターユス、アミターバ

ー、即ち無量壽無量光の略です。

つまり、どうぞ無量と名づくる佛

よ、といふ意味なのです。

佛教の究極の目的は、菩提涅槃

にあると云ひます。即ち覺、悟り

とは滅、不死とであつて、智慧と

壽命、精神活動と生命慾求との理

想形態をいふのだから、恰も阿彌

陀佛の無量壽無量光とは斯る二面

の絶對相を示すものと言へる。従

つて念佛は佛教徒の究極目的實現

の爲の最も勝れた最も容易い手段

とも言ひ得ませう。

念佛は佛教徒の有つ念願の最も

端的な表明であり、最端的な實踐

なのです。

どうぞ阿彌陀ほとけよ、と歸依

する處に、人間生活の穢汚に染つ

た思惟感情行爲が清められ、生命

の永遠と人格の光りとを、求めゆ

く正しい生活が成就されて參るの

です。それを白道と云ひ、又念佛

者を人中の白蓮華とも申します。

何故ならば、念佛者には阿彌陀佛

の増上力に依るお導きがあるからです。たとへ人間の惑ひが深くとも佛の増上縁に導かれゆくが故に覺ては無上の悟入を得ることでありませう。念佛を申すところに佛我らと共に在すの感を深くし、佛我らを照し給ふとの確信が生じます。云々」

且「それは心底から念佛申す者のみが味ふ境地ですね」

S「念佛の貴さは味はねば分らない」

先生「饅頭の味は理窟では分らぬ。食べるのが第一ですがね。然し若い人は仲々そこまで踏込めないのですよ」

K「阿彌陀佛が無限の生命と無上の人格とであるとして、その存在はどうして知ることが出来るでせうか」

且「念佛ですよ」

先生「さう、念佛の信仰に依て感得し得るのです。」

一體、阿彌陀佛の存在を何か個體的なものやうに考へるのは悪い傾向ですよ。何か個體的な、世界の原因、作爲者のやうに受取るのは、寧ろ西洋風な存在論的觀方の惡影響でせう。阿彌陀佛を二十萬億の彼方の世界に置くのは、決して地理的、所在的な意味ではない。指方立相といふのは別の機會に譲るが宗教的な依處の指標とも言ふべきものです。

それらは凡て存在的な見方でなく生命觀的に觀てゆかねば飛んでもない誤解を起すことになる。

阿彌陀佛は、もし存在論的にいふならば、虚無の身、無極の體であるのです。大宇宙に遍滿する大生命とも名づくべきでせう。個體的觀念を以ては推測られないが

體かに實在するものであり、活き働きかくる何らか大いなる御力であるとも言へませう。

つまり宗教的對象は決して單なる觀念體系でも、心的投射でもない。世界の原因でも、實體でもない。そこにいまし、呼吸し、活躍する秀れたるいのちである。

所で既に個體的獨立的な宇宙の實體であるのではないとしても、いまさざる所なきものと聞くと、どこにでも在るものなら一つ見せて下さいなどといふ野狐禪の人があるが、實際私もそんな人に出會つたこともある位だが、それは自分の眼も開かず到目前の境界を見せよといふに等しい言方ではなからうか。茶碗や腕時計とは違ふのである。

もつとも茶碗や腕時計を出されて、直ちに茶碗や腕時計の原理を

悟り得る人もあらう。同様に日常生活の凡百の中に阿彌陀佛を感知する人も無くはない。既にそれはその人が阿彌陀佛信仰の開眼を得て見得る底に到達して居るに依てである。けれども、茶碗や腕時計が存在しないからといつてその原理は無かつたのではない。又茶碗や時計を目前にしたがらもその原理を了得し得ないからといつてその原理が無いとどうして言へやう。阿彌陀佛の存在に就ても亦たその通りである。

餘りに大なる振動は聞えず、餘りに強き光波は見えない。凡ての色彩の集合は却つて無色である。空氣の恩恵、時空への依存性は、寧ろ把握し難い。水中の金魚はアップ／＼して始めて空氣の有難さを感じずるかも知れないが、而も水の同様な有難さは分らぬであらう

やうに、人間も苦しい時の神頼みはしても、その日常に於て同じ慰撫の下にあるに氣付き難いのである。

月影のいたるぬ里はなけれども

眺むる人の心にぞ住む

と法然上人の遊ばされてゐる如く眼を上げて仰ぎ見る時初めて月の光照に氣付くのである。その如く念佛の信眼開けて始めて佛我と共に在るを感ずるに到る。もとより

み佛の恩澤は之を見ざる者知らざる者にも及んでゐたのであつた。

阿彌陀佛は光壽無量に在す。即ち大宇宙に活き働き無窮に進展しゆく大生命であり大生命の力である。生きとし生ける者を生かし、ありとあらゆる文化の進展、生命の進展を展示し給ふみ力である。

精神と肉體、物質と文化、生命の欲求と精神活動、自己保存と種族

保存の欲求等、之等の凡ては阿彌陀佛の二面の活動の中に展開せらるる姿である。阿彌陀佛の光被の下に可能な姿である。あらゆる個體的存在はそれらを買いて流るる全體生命の現れでしかないのである。此の事實を知ることが阿彌陀佛の存在を把握する所以でもある。我れ阿彌陀佛の中に、阿彌陀佛の救ひの中に住めり、との信仰の確立でもある。

しかし、情無いかた、多くの個體的存在は殆んど彼自身の個體中心の生をしか持たない。そして全體に連ることなき個體的欲求に縛せられて、自らの狭き醜き愚かなる路をのみ辿つてゆく。この生の縛が、個在の悲しい運命である所に、人間の悲劇がある。そしてそこに宗教の救ひが必須なる運命打開路として與へられてゐるの

である。

個在に生き個在に死する所に、生死流轉の迷の相が現はれる。之を打破して全體生命に歸入しゆく所に人生の安心立命が初めて確立せられる。此の歸入の姿が念佛であり、此の安立が淨土往生の相として示される事柄なのである。

もとより我々は凡夫である。斯く思ひつつも兎もすれば生死に轉落し易い。さればこそ常なる念佛の道に依て阿彌陀佛と共に在り阿彌陀佛に導かれゆく生を送る外はないのである。自らの生を内省し自らの愚かさを痛感する時、念佛の救ひ以外に眞實の生の展開のないことは氣付かせられるであらう。

阿彌陀佛については、報身報土本願等餘りに語るべきことが多いが別の機に譲らう。

要するに阿彌陀佛の存在といふことを生命觀的に見て存在論的に取扱はないこと、それからそれが自己の生の内省とそれよりする生の止揚の爲以外に爲されてはならないこと、即ち眞摯なる求道心以外に阿彌陀佛の存在を知るに至る道はないことに到らねばならぬであらう。云々

記者の覺書は或は先生の意味を把り損つてゐるかも知れぬ。然し此の大いなる問題について此の若き學生が願はくば單なる知識的疑問からではなく眞に宗教的な求道を、記者は心中に念じたのであつた。

……………

「淨き友の會」十二月例会案内は四六頁にのせてあります。



雪玉

松原 敏夫

朝起きて見ると、昨夜から降り出した牡丹雪が、三十握ばかりもつもつてゐました。

「やあ、きれいだなあ」

時夫さんが、寒さをがまんして、縁側に立ち、庭木に花のやうに積つた雪を見てゐますと、

「雪玉合戦やらないか」

元氣なこゑが聞こへて、健一さんと進さんが、裏口から入つて來ました。二人の顔は寒い風に吹かれたせゐか、りんごのやうにまっかになつてゐました。

「よし、やらう。今日は勝つて見せるぞ」

時夫さんはキツと、進さんの顔を見ました。

じつは一週間ばかり前、雪が降つた時にも三人は雪玉合戦をしたのですが、二人ともあつさり、進さんに負けてしまつたのです。

進さんは雪玉づくりがとても上手でした。進さんのこさへた雪玉は、彈丸のやうにかたくて、たいていの子供は負けてしまふのでした。

三人は庭石の上に積つた雪をかきわけて、

中から眞白な、それこそ眞綿のやうな雪を二つかみづつ、つかみだしました。その雪で、鈴玉をこさへると、それを。縁側の柱や板にあてて、まはしながら、何度も何度も、ギユウギユウいはせておさへつけました。水が出て、玉は前より小さくなりました。しかしかたくなりました。これが、雪玉の心になるのです。

氣の短い時夫さんは、もう大丈夫かたくなつたと思つて、手をやすめて進さんの方を見ると、進さんは大きな目をむいて、まだギユウギユウと、縁側におしつけてゐました。健一さんも、まだ一生けんめいです。

「これはいけない。」

時夫さんはあわてて、また心をおさへつけるのでした。しつかりした心をこさへないとよい雪玉はできないのです。

やうやく心ができあがると、三人は思ひ思ひの所へ行つて、心に雪を食はせ初めました。雪をかぶせて、心を大きくすることを雪を食はせるといふのです。

進さんは、土蔵の前へ行きました。健一さんは納屋の横へ行きました。時夫さんは此の家の子だから縁側に残りました。

こんな風に、はなればなれにならないと、話をしたりして雪玉づくりのさまたげになるからです。

三人はまた雪をかきわけて、新らしい雪をつかんで来ると、サツと地べたにまきました。やはらかい雪は、刷毛ではいたやうに平たく、地べたにくつつきました。その上にさつきの心をのせて、はいてある下駄のつまさきで、つぶれぬやうに用心しながら、そろりそろりとまはした。心は雪をかぶつて、見ちがへるやうに大きくなりました。

こんどはそれを土の上にちかにおいて、同じく下駄のつまさきで、おさへつけながらまはしました。雪玉は泥水を吸ひこんで、見る見るうちに泥色になりました。

雪を食はせてはおさへつける——これを何度もくりかへしてゐると、しまひに雪玉は、ピンボンの玉のやうな大きになります。そ

して、何百ぺんとなく、下駄のきつさきでギユウギユウおさへつけられるので、コチコチに、石のやうにかたくなるのです。

三人は前かがみになつて、つまさきに力を入れて、わき目もふらずに、雪玉をまはしてゐました。寒さも何も忘れてしまひました。

「今日こそ、進さんに勝ちたい」

時夫さんは、そのことばかり考へてゐました。それで、しらずしらずのうちに、雪玉をまはす足が、おろそかになつてゐました。

「あつ、さうだ」

ふと、ある考が、時夫さんの頭に浮かびました。それは悪い考でしたので、時夫さ



んは思はず顔を赤くしながら、そつと、進さんと健一さんの方をうかがひました。二人は一生けんめいになつて、雪玉をまはしてゐます。

「進さん……」

呼んで見ましたが聞こへぬのか返事もしません。

「健ちゃん……」

こんどは健一さんと呼んで見ましたが、やつぱりへんじをしません。

「僕ね、ちよつと、はばかりへ行つてくるから」

時夫さんはといふと、そつと雪玉を手にして臺所へやつて來ました。そしてすばやく、櫛の上の壺から櫛をつかみだすと、パツとまいて、だれも見えてゐる者はないのに、大あわてにあわてて、その櫛を雪玉に食はせました。

雪に櫛をまぜると、氷のやうになるものです。時夫さんの雪玉は、氷の玉のやうに光つて來ました。見るからかたさうです。

「これなら、進さんの雪玉に負けるものか」

時夫さんは思ひました。

雪玉に櫛をまぜる事は、合戦のきそくとして禁じられてゐました。時夫さんは、それをよく知つてゐましたが、進さんに勝ちたい一心から、そんな、ひけふなまねをしたのです。

しばらくたつて、時夫さんは二人のそばへ行くと、

「僕はもうできたよ、二人ともぐづだなあ」といひました。

やがて、進さんのも健一さんのもできあがりました。三人は地べたに雪玉をならべました。なるほど進さんのは、泥をふくんで眞黒になり、見るから弾丸のやうにかたさうでした。健一さんのも、それにおとらず、かたさうに思へました。

しかし時夫さんは「今に見ろ」と、心の中でニヤニヤ笑つてゐました。三人はジャンケンをしました。

「ジャケン ホイ」

時夫さんが負けました。

「アイコデ ホイ」

健一さんが勝ちました。健一さんはじぶんの雪玉をひろひあげると、進さんの雪玉を目がけて、ハツシとばかり投げつけました。すると、「カツチ」と音がして、健一さんの雪玉は、はねかへり、ころころところびました。よく見ると健一さんのは、ひびが入つてゐました。

こんどは進さんが、「ヤツ」とさけんで、健一さんのに投げつけました。

「ゴチツ」と、にこつた音がしたかと思ふと、健一さんの雪玉は二つにわれました。

「ウーム」

さんねんさうに、健一さんはわれた雪玉をひろひあげました。われ口を見ると、雪を食つたあとが、きれいに段々になつてゐます。

いよいよ、時夫さんの番です。時夫さんは今日こそ、進さんの雪玉を眞二つにしてやうと、ねらひつけると、

「エイッ！」

かけこゑもろとも、力をこめて投げつけま



した。ところが、どうしたのでせう。眞二つにわれたのは、進さんのでなくて、時夫さんのでありました。

「……」

時夫さんは物もいへず、ボカンとして、しばらくあつけにとられてゐました。鹽をまぜたのに、こんなにもろくわれてしまふなんて……

やがて時夫さんの目には、くやし涙さへりかんで來ました。

進さんは、ちつと時夫さんの顔をみつめてゐましたが、何と思つたのか、進さんの雪玉を、庭石目がけて力い

つぱいたたきつけました。さすがの進さんの雪玉も石にあつてはかなひません。眞二つにわれてしまひました。

「時夫さん、また遊ばうね」
進さんはいふと、健一さんをさそつて、かへつて行きました。

時夫さんは「さよなら」もいはずに、二人のうしろ姿をぼんやり見送つてゐましたが、やがて氣がつくと、地べたにころがつてゐる進さんの雪玉の半分を手にとつてつくづくながめしました。

進さんの雪玉は強いはずです。食つた雪がぜんぶ氷になつてゐて、雪玉といふより、まるで氷玉でした。指ではじいて見ると、「コッ」「コッ」指がはねかへつていたほどです。

こんどは、自分のをひろひあげて見ました。よく見ると、鹽を食はせた上の方だけは氷になつてゐましたが、中の方はまだ雪の色でした。



父の立場

醫學博士 三田 谷 啓

父になることはやさしい。けれども眞に父になることはむずかしい。父はその妻に子を生せるだけが能ではない。一旦父となつた以上、その子をよく育てあげねばならぬ義務がある。

一人の人間がよくなれば世間はそれだけ明るくなり、悪くなればそれだけ暗くなる。父は母と共同責任をもつて子を善導する覺悟をもつ必要がある。たとひ子女の訓育を母に委ねると

も、父としての責任と義務を忽にしてはならない。子を自由にて育てるのはいいが、放任するのでは斷じていけない。

父は多く外で仕事をするから、一々子女の教養に手を用ひることは出来ない。しかしその大綱はつかんでおく必要がある。そして育児の方針は父母共に一致してゐなければならぬ。子女の教育が誤られて生存の意義を没却する様になつたら親も子も共崩れである。世には子女

に捨てられる親もあるが、それは所謂共崩れなのである。

母にも缺陷があるが、父にもある。缺陷は父も母も之を是正することを考へねばならぬ。缺陷を缺點と知らずに居ればこそ改まらないのである。嚴格だけが父の本分の様に思つてゐる人があるが、冷酷な嚴格は子女を殺す。その實例は求めればいくらでもある。子女を訓戒することはより大

切であるが、父本人が素行の收まらぬ人であつたら千百の文句は何の役にも立たない。お父さんなど子に意見する資格はない」と、子に言はれるやうでは言葉の訓戒の役に立たぬことは勿論、決して父を模範などとは思はない。

親は子と諸共に修養する必要がある。それでなければ親は偉くなれない。親は子を教へると云ふが、時には子より親が教へて貰ふことがある。親が自分の缺陷を改めようと思へば先づ何よりもその缺陷を認識するが必要である。今日では父が自己の缺陷を認識せずに居る場合が甚だ多い。たとへ父は教育を本職とせぬ迄も、子女の教育の大綱はこれを握つておらねばならぬ

實業家や政治家等の中には、勤もすると子女の教育を犠牲にする人がある。もとよりそれには色々の事情はあらうが、子女としては非常な禍ひである、心掛さへあれば父として子の義務や教育のことなど修養が出来るのである。

◇

多くの父親は自分の興味を子に強ゆる傾向がある。母にもあるが父の方が著しいやうである。そしてそれと成功とを結びつけたがる。物を主に考へる父は物質萬能で行かうとする。そこで精神方面の學問など眼中に置かない。

極端な考へをする人では金が必要なければ成功でないやうに思ふ場合がある。なるほど金も大事

だが、金持になることのみが成功とは限らない。この成功の概念が今日では甚だ不徹底だと思ふ。これによつて多くの子女を誤ることになる。

人間の悉くが金持になつて現在の金持の營んでゐるやうな生活をしたしたら幾何もなくして世はつぶれてしまふであらう。貧しい人の中から拜まれる人がでて来る。拜まれたらそれが成功である。貧乏でも大發明をしたら世間のためになる。資産がなくても人を救ふたら恩人になれる。これが成功である。成功は天分を發揮するため、全身全力をつくして責任ある生活をする。ことだと考へたら、物質主義の人でもいくらか成功觀が變つて來ると思ふ。

子に授けられた才能と興味とを無視して、親の好むまゝに進ませようとしてもそれは斷じて成功しない。何故ならば自然の法則に背くからである。

◇

父が金儲けに熱中し、子女の教育を全く忽にした例が世間に少くない。ある精力家があつた。一代に大きな身代を造つた子女は十幾人もあつた。その中に妾腹の子供も混つてゐた。けれども生せるだけでよく教育することゝ忘れてゐた。金さへあれば世の中のことは何でも出来ないことはないと考へて居つたのである。田を買ひ、山を買つた。ところが子が青年になつた頃放蕩しだした。そして身代を崩しにかゝつた。父は困り果て

である先生の所へ救つてくれと頼みに行つた。先生は何と言つたか。

「君はお金さへあればどんなことでも天下にできないことはないと言つた。そのお金の力で放蕩息子を救ふわけに行かないか」

これにはさがの拜金主義の父も二度と口があかなかつたさうである。

斯くて財産は造つたが、これを託して置く子がない。どれもこれもぼんくらで、不良で役に立たない。片足が棺内に入りながらまだ後事を託する子が見つかからない世にもあはれた人がある。皮肉と云へば皮肉だが人生最終の動きを見るとき同情に堪えない。(完)

信仰相談

擔中村辨康

生死解脫と業の連續とは

問

生死を諦觀し解脫するとは何う云ふ事を指して云つて居るのでせうか。此世を厭ひ死期の來るのを悦ぶのでは無くて、死ぬるも結構、生きるも結構と覺悟することのやうにも承つて居りますが、……

縛から斷離した以上、後には繼續する何物も無い事に思はれてなりません。其處でまた問題になるのは淨土教に説れる還相廻向の事ですけれど。毎度御示教を頂き恐縮に存じますが何卒右御教示の程を伏して御願ひ致します。

(京都・上京・小林常人)

答

至極ごもつとも御尋ねで、また非常にむづかしい問題であります。果して御納得が出来るか何うか判りませんが一應申し上げて見ます。

御尋ねの要點は「生死解脫」の状態を現在と死後とに分ち、現在の状態は生死を問題にしない心境を云つたのではないか。また死後

は虚無になるものではないか。第三には一旦虚無になつたのに何故に還相し得るであらうか。此の三點のやうです。そして前の二は聖道門的な意味からの御尋ねでありあとの一つは聖道門的な解釋の基礎に立つて淨土門的なものを見て行かうとして居るものです。

先づ生死を諦觀し生死を解脫すとは緣起の理にめざめて「我」と執着するものなく「我の所有」とすべき何物もないと諦觀する時、生死は波の起伏であり、草の庵の結ばれ解かれ行く姿であつて、畢竟差別相への執着が私達の感情を左右して居たのであることに氣付きます。そこで消極的な意味から云つて生死を脱却したことになるのですけれども、之を積極的に眺むれば天地の大生命に隨順し大生命の流れに沿ふてなすべきをなしたすべからざるをなさざることその事が本當の生であつて、單なる時間上の消長を以て生命とするものでないことを明瞭に悟ります。つまり時間上の生死の觀念から脱け出て眞實の生命に生きぬくやうになるのです。生死解脫の悟の世

界とは此の心境を指すもので、肉體の存続如何よりも此眞生正命こそたとへ一瞬の短い時間であつても永遠の生命であり、天地の大自然への倚與であり、本當の價值に生きるものです。有無觀的なものでなく、いつも永遠に輝く生命なのです。随つて死んだら虚無空無になると云ふ問題から離れるのです。また業は惡業に名付けたもので、煩惱の世界執着の世界に於て假に善業惡業不定業の三を區別して居るけれども、それは畢竟じて凡て惡業に過ぎないと見ます。だから六道をさまよつて居る次第なのです。ところが生死を達觀し有無苦樂斷常の偏見から抜け出ることが出来れば、謂ゆる聖者の境界ですから死後は空無になるだらう虚無になるだらうなどと云ふやうな有無斷常の考へは毛頭ない筈です。私達は畢竟存在觀的差別思想の上に立つて居て色々想像して居るのですから、いくら考へたとて考への基礎がちがつて居るから分る筈がありません。殊に私達は聖道門を學ばふと志して居る者ではありませんから、聖道門流の證

後が何んな状態であらうかと穿索する必要は毫もないと思ひます。

御承知のやうに淨土門では煩惱の斷盡を問題にして居りません。煩惱なき生活を要求しては居りますけれども、自分ではどうしやうもないのです。だからこそ如來様の悲願を頼んで淨土への往生を願求して居るのです。

また業がなくなると生命の連續がないやうに思ふのは小乗教です。業がなくなれば六道を輪廻することがなくなるのであり聖なる世界での覺醒生活を営むことになるというのが大乘教です。其處には輪廻的な流轉なき眞生

の世界正命の世界があらはれると云ふので

す。小乗教では無餘涅槃を理想としましたが小乗教で解する如き無餘涅槃は推理から來た夢であつて眞實ではないから大乘教に於ては生死にも住せず涅槃にも住せざる「無住所涅槃」を理想として居り煩惱が斷盡され惡業がなくなつても正業はありますから生命が正しく生き輝やいて行く譯です。殊に私達の如來様は無量壽ではありますせんか。無量壽の中に生きることをこそ私達は念願して居るのではありますせんか。だからかうした聖道門的な問題に餘り氣を使ふ必要はないのです。

聖天と藏王權現とは何か

二問

聖天と藏王權現とは佛様ですか、神様ですか、僧侶が奉仕して居る

様に聞きますので佛様とは思ひますが、二佛の御縁日に御經は何を讀むのでせうか、また御縁日に御供へする品物は何々でせうか御

教示願ひます。尙ほ右佛様の御正當とか申し春秋二季に大祭をせなければならぬ月日も御教示願ひます。(島根・本郷・吉村生)

二答

聖天は歡喜自在天、大聖歡喜天と云ひ、後から佛教の中に入つて來

た天部の神様です。其形像には單身と雙身とあり、象頭人身で、雙身は夫婦の二天が互ひに抱き合つて居ります。印度に於てはかなり古くから尊崇され障礙もするがまた障礙を除いても呉れ、また智慧の神様もとして居たさうです。

聖天様を祀るには眞言の方で「歡喜天法」と云ふのがあつて「障礙を除き富貴を得んが爲め」に修するのださうです。其法には「浴油供」と云ふ「油いり」と「酒供」及び「華水供」との三法あるとの事です。浴油供の法は胡麻の油一升を取り呪文を唱へること一百八遍して淨めた上、其油を煮て淨銅盤に移し、それへ聖天様の像を入れて、銅の匙又は杓で聖天様の頭に灌ぐこと一百八遍、それを朝四回正午に三回都合毎日七回宛七日間行ふと祈願が満足すると云ふのです。供へ物は酒、菓子、だいこんなどださうです。また華水供は雨詣の時などに行ふもので油に代ふるに香水を以てするだけの相違だとの事。唱へごとは陀羅尼ですがそれは陀茶尼集經、大使呪法經

歡喜天講式など御覽下されば分るさうです。

また藏王權現は大和國吉野郡金峯山藏王堂に安置して居る本尊のことで、藏王菩薩、金剛藏王菩薩、金峯山權現の名がありますが其本體はよく分りません。安閑天皇だと云ふ説もあり、少彦名命だと云ふ説もあり、また役行者が感得したお姿だと云ふ説もあつてハッキリしません。大體金剛童子に似て居り天部の神様らしい姿です。藏王の名は胎藏界曼荼羅虚空藏院中にあるけれども形像が全然異りお經や儀軌中にもないさうです。多分役行者から始まつたものだらうと想像されます。其御經や緣日や御供物のことは分りません。吉野の藏王堂へきゝ合せられたら分るでせう。

以上御答へしたのですが、かうしたことは淨土教には關係のないことでもあり、且つ信仰上の問題ではありませんから、今後かゝる問題に對しては御答へしないことにします。信仰上に何の益もないからです。

信仰坐談會案内

一、日時 来る十二月十日(第二日曜)
午後一時—四時

十二月はそれ〴〵御忙がしいことと存じますので一回だけに致しました。そして夜分より晝の方が却てよろしいかと存じ午後から開きます。何うぞ御都合をおつけ遊ばして御知己御詩ひ合せ御來會下さいますやうおすゝめ致します。

一、場所 本郷區東片町七八

美容大學院橋本樂榮方

電話小石川 四九七六番

一、講題 法語「登山狀」

一、講師 中村辨康先生

淨き友の會幹事



松阪市 清 瀧 やす

いとまあれば枯れたる萩を刈りたまふ

評「ひまあれば」と云ふやうな、ガサツな表現を避けて「いとまあれば……たまふ」とした爲に敬虔な念にうたれて尊い方のかゝつてゐる様に思はれる。敢へて何もしたくともよきさうなものであるが、徒然なるを好まず、せつせと萩を刈られてゐると云ふところから、私の大變お世話になつた遊藝上人のやうな、きさくな親僧の事が偲ばれる。

堺市 笠井 松枝

萩寺や僧も出て見る眞晝どき

評「萩共から見れば、坊さんはお経さへ讀んでをれば、外には用が無い様に思はれるが、さて其道に入つて見ると何かにつけて忙しい事のあるものかも知れない。萩咲く頃の萩寺のことであるから遊藝客が相當來てゐるに違ひない。お晝一寸の暇を得て、坊さんも庭へ出て萩の模様やら人々の様子を見てゐたと云ふのである。下五字が利いてゐる。

東京市 伊 屋 代

日向ぼこしておわす母そと寫す

評「おはす」に對しては「寫しまへらする」としたい處であるが、此處等は短詩のかなしさかも知れない。然し「そと」と云ふ表現は此の缺點をかなりに補つてゐると思ふ。此の表現には争はれぬ親子の血が通つてゐる。愛がある。明るさがある。

小樽 平井 善慈

風道に呼吸の白さのはずみけり

同 水室 凡子

落葉ちる秋の來りぬ踏みて出づ

和歌山 柿本文子

後行く夢の紅きを乗り越えて

東京 三野 輪幸節

芙蓉咲いて淨らな露をもちてけり

小樽 中村 茂樹

船の灯にうつりうつりらず浮寝鳥

香川縣 荒木 はち

年とれば聲もほそりぬきりくす

新宮 奥村 映水

明日送る菟藟芋や虫の聲

名古屋 友瀧 晋歩

ビルの窓を牙えたる月に傾ける

同 福田 眞吉
炭焼の上こればげしき手帖かな

京都市 日向 法圓

曼珠沙華堤を追うて續きある

高知縣 松本 みどり

み佛の假の住居を煤拂ひ

會津若松陸軍病院 宮下 光雄

柳散りて露けくなりし汀か

大津日赤陸軍病院 島田 呂月

流星に見えて湖畔の三上山

青森市 高松 正覺坊

初嵐水の一重を濁らせて

京都 永田 七郎

燈消して夜店しまいぬ秋の月

大阪府 山岸 善良

袈裟に鯉飛び來て飛びゆけり

長野縣 宮澤 榮子

秋の月庭に描きて潦

宮城縣 渡邊 喜吉

葦送る文書いてをり夜長妻

石川 西村 けん治郎

稻穂の高くなりゆくせわしなや

朝鮮 鹽江 八年坊

大根をあらつて居れば鵲來鳴く

横濱 小宮 風平

百鳥高く鳴きて臘期の來りけり

東京 木村 多吉
月更けて影をひくたる落葉風

龍崎寺陸軍病院 田尾 晋羽

逝ける人とむらふもよき時雨かな

名古屋 堀場 典雄

青空に憩ひて蜜柑むくもよし

群馬縣 設樂 香風

爐話や羅飼のことにとやかくと

新潟縣村松陸軍病院 宮島 光恵子

桑を切る先に見えたる白牡丹

栃木 大輪 云海

秋深み千日草に蝶群るゝ

廣島 小園 邦香

柿を手に髪刈られゐる童かな

山口縣 長岡 見智

魚籠置けば掘りのわろさ鰻を釣る

旅順陸軍病院 清川 一召

窓よりの小春日和を愛しけり

長崎 池田 直三

この寒さ蝶の別れとなるらんか

會津 齋藤 華舟

柿をもぐ妻をあわれと見つ病めり

富山縣 内山 滋水

薄霧の中より懸り稱名瀧

投稿規定

官製はがきに一回二句以内とし「淨土」編輯部併置係あて送ると。



讃嘆しつゝ、念願しつゝ

— 日常勤行式解説 —

中村 辨 康

(二五) 三 唱禮 (再び如來の前に
ひれ伏して)

南無阿彌陀佛 南無阿彌陀佛 南無阿彌陀佛

南無阿彌陀佛 南無阿彌陀佛 南無阿彌陀佛

南無阿彌陀佛 南無阿彌陀佛 南無阿彌陀佛

第一唱で立ち、第二唱で如來の端嚴なる相好を仰ぎ見、第三唱で如來の御足を我が掌の上に置く思ひで、恭しく敬禮するのである。之を何回も繰返すのを「禮拜正行」と云つて、懺悔又は恭敬の誠を盡す意味を身に表現するのであるが、此處ではそれを三回行つて如來を稱讃し恭敬する氣持を表はし

如來の御前にひれふすのである。又た之に替ふるに「三身禮」と稱するものを用ひてもよく「三歸禮」と云ふのを用ひてもよい。

「三身禮」は如來の御働きを再認識しながら禮拜するのであ

り「三歸禮」は佛法僧の三寶に歸依するばかりでなく其内容の一分を我身に現はすべく一切の人々と共に如來の淨土に往生せんことを願求するのである。

三 身 禮

南無西方極樂世界本願成就身阿彌陀佛

南無西方極樂世界光明攝取身阿彌陀佛

南無西方極樂世界來迎引接身阿彌陀佛

(日用念誦ニ出ツ)

(國譯)

西方極樂世界にまします本願成就の身たる阿彌陀佛に南無し奉る。

西方極樂世界にまします光明攝取の身たる阿彌

陀佛に南無し奉る。

西方極樂世界にまします來迎引接の身たる阿彌陀佛に南無し奉る。

(意譯)

如來機は私達下根下劣の凡夫をお救ひ下さる爲に、非常なる大慈悲から四十八の本願をお立てになり、永い間の苦心慘難に依て悉くそれを完成され、遂に阿彌陀佛となられて西方の淨土即ち極樂世界を建立なさいました。是故に私達は現に西方極樂の世界に在す本願成就の御身としての阿彌陀佛に歸命せずには居られません。

また私達をおんいつくしみ下さいまして常に慈光を以て接取し護念して居て下さることは此上もない喜びであります。是故に現に西方の極樂世界に在す光明攝取の御働きをなし玉ふ阿彌陀佛に歸命いたします。

また更にはかくの如く平生慈光を以て御救ひ下さるばかりでなく最後臨終の時には親しく私の枕もとまで御來迎下されお淨土へ引接して下さることは誠に大慈悲の致すところで、此上もない喜びでございます。是故にいま現に西方極樂の世界に在す來迎引接の御働きをなし玉ふ阿彌陀佛に歸命いたします。

三 歸 禮

歸佛得菩提	道心恒不退	願共諸衆生	回顧往
生無量壽國	得大總持門	願共諸衆生	回顧往
歸法薩婆若	同入和合海	願共諸衆生	回顧往
生無量壽國			
歸僧息諍論			
生無量壽國			

(往生禮讚ニ出ヅ)

(國譯)

佛の菩提を得たまふに歸し奉る。道心恒に不退ならん。願くば諸の衆生と共に、無量壽の國に往生せんと回顧し奉る。

法の薩婆若に歸し奉る。大總持門を得ん。願くは諸の衆生と共に、無量壽の國に往生せんと回顧したてまつる。

僧の諍論を息むるに歸し奉る。同じく和合の海に入らん。願くは諸の衆生と共に、無量壽の國に往生せんと回顧し奉る。

(意譯)

佛は無上の菩提を得て居られます。私が今ま佛に歸依し奉る

のは私もまた無上菩提を證得したいからであります。然しそれには私の求道心が途中で挫折して住まふやうでは何にもなりませんから不退轉でありたいと思ひます。然かもそれは單に私一人の爲のものでなく他の多くの人々と共に無量壽の國に往生して其國で佛を完成したいから今そのことを念願致します。また佛の法は言葉では云ひ盡すことの出来ない妙智であります。私が今この法の妙智に歸依いたします所以のものは、その廣大なる道德の門に入り以て道德を完成したいからであります。然かもそれは單に私一箇だけの問題ではありませんから、他の多くの人々と共に無量壽の國に往生して、それを完成したいと念願するのであります。

また佛法教團の僧衆達は誠によく和合して居る團體であります。今ま私が僧衆に歸依いたしますのは訝ひあげつらふことのない眞正なる社會を得たいからであります。それは恰度色々異つた川の水が海に流入すれば同一な鹽水となるやうなものです。この同一和合の海水と同じやうに私達も亦たお互ひに睦み合つて行きたいものであります。然かもそれは私一人のよくなし遂げ得ることではありません。他の多くの人々と共に、無量壽の國に往生して初めて完成し得ることですから、共に如来の世界に往生せんことを念願いたします。

講 贊

信仰にも育つ信仰と育たない信仰とがある。嚴密に云ふと育たない信仰は實は信仰ではないのであつて、單なる概念か、或は誤つた迷信かであり、畢竟執着に過ぎないものである。

煩惱の中には「戒禁取見」と云ふものが加へられて居るが、それは迷信のことを云つたもので「戒禁」即ち色々な禁制に依て生活戒しめて行くのであるから一見眞摯な信仰深い姿に見えるけれども、それを「善なり」と思ひ込んで他の事を一も二もなく無批判に「駄目」だと毛嫌ひし、甚だしきに到つては頭から之に惡罵を加へ排斥壓迫危害をまで加へんとするのであるから確かに惡見である、それも畢竟「取」と云ふ執着が排他的な行爲や感情を生んで他の如何なる眞理や善事に耳をかさうとさせないのである。

「見取見」即ち「先入主」の概念固執のいけないのは判り切つたことであるけれども、それに輪を越えて宗教的な強烈な感情が加味されて居るだけそれだけ一層始末におへないのである。

之は元より「執着」であつて正信でないから、そこに何等の進歩も見えないのである。理智と情意と相並んで進み段々人柄が出来て來なくてはならないのに、唯だ頑固一徹であるばかりで著にも率にもかゝらないのである。

信仰は決して固執ではない。信じ仰ぐ姿、即ち何時でも如来様の御導きに歸依信順する陶冶性が豊富に養はれて居なければなら

ないものである。

私達は此「日常勤行式」に依つて最も正しい信仰に導かれて来たことは幸せである。

初めは自分をよくすることにのみ心が向けられて他を顧みる暇もなかつたが、段々導かれて見ると周囲を見る眼もあき他と共に進まねば自分も亦た進めないことを知つて來、更には自分よりも先づ以て他を進ましめることが先決問題であつて、他の進むことが其まゝ自分の本當の喜びであり進みであると氣が付くまでに育てられて來たのである。

是れ偏へに如來様の慈光の然らしめたところのもので、今更ながらに如來渴仰の念を深くするのである。

そこで私達の宗教感情は何うしても立つて禮拜せずには居られない衝動にかられて來るので、茲に三唱禮をなし立つて三拜するのである。

是れ讚嘆の氣持から行はれる禮拜正行である。

またこの三唱禮に替へるに三身禮を以てすると一層内容的に讚嘆の意味が明瞭になる。實は三唱禮の方が意味が深いのであるけれども、初心の者には文字で限定された方が判り易いから三身禮を用ゐる場合が多い譯でもある。

「三身禮」は如來の大悲身を三つに分けて一應

本願成就身——働きの基礎

光明攝取身——平生

衆生への働き

來迎引接身——臨終

としたのであるが、如來様のお身體が三つある譯でないことは云ふまでもない。

「光明攝取」と「來迎引接」とは古來平生と臨終とに使ひ分けて居るが、信ずる者の氣持としては平生と臨終との區別がある譯でなく平生に於て常に光明の中に攝取せられつゝ、しかもまた常に如來に導かれつゝ進まして頂いて居るのだから、平生も亦た來迎引接されて居る「感じ」があるのである。唯だ平生には光明攝取の方が強く、また恐らく臨終には來迎引接の感じを強く感ずるのであらうと想像される。

次に三歸禮を採用する場合は初めの香偈の次ぎに三寶禮をなし佛敎通途の歸敬を行つたそれに對應するもので、首尾一貫の形を取つて居る譯であるが、始めの一般的の意味の歸依三寶と違つて今度のは意味がもつと深く且つ淨土敎的な氣持が強く出て居る一種特別な「三歸」である。

初めの「三寶禮」は

十方常住の三寶

に歸敬するもので、其三寶はむしろ既存の置かれたるものに對して居るのに反し、今度のは單に置かれたる眞理に歸敬するばかりでなく、それを我身に體得せんとするものである。

道心恒不退——無上の菩提を志求して

得大總持門——無盡の法門を學び

同入和合海——無量の衆生とむつま合はん

加之、其願は一切の人々と共に均しく國家的社會的に達成せんとして居るのである。

即ち總回向の偈に於ては「願往生心」を起し、總願偈に於ては主として廣く「願度衆生心」に立ち、社會的な氣持が濃くなつて來たのであるが、今度の三歸禮に於てはもつとはつきりした「願共諸衆生往生無量壽國心」を開發せしめられたのである。

願往生心——往相回向

願度衆生心——還相回向

願共諸衆生往生無量壽國心——莊嚴淨土

かくの如く私達の「願心」は非常のスピードを以て大人の願にまで進められて來たのであるが、尙ほ其願の目的とするところも

往生安樂國——感情的

共生極樂成佛道——意志的

與衆生共生無量壽國——生命的

三段飛びをして居ることが發見されるのである。

想へば誠に不思議の限りである。如來大悲の廣大無邊にして如何に私達を惜しみなく接収し引導し啓發せしめて下さつて居る

か、かうした「日常勤行式」のやうな簡單のものにまでも、實に深奥なる聖旨が籠められ、私達をして常に向上の一路に邁進せしむるやう仕向けて下さつて居るのは實に驚くべきことである。

私達は遂に行き着くところまで來たやうである。人間の及ぶ限りのところまで進められて來たやうである。

現に私の生命は如來様の無量壽の中に攝収されて絕對安全である。

其上に私の生活は如來様の無量光の中に護念されて絕對安樂である。

人間生活煩惱生活を營んで居るのであるから、無論苦しいこともあり悲しいこともあるけれども、それもこれも畢竟如來様の無量光明無量壽命中の一小些事であつて、恰かも子供が親の愛の中に育てられつゝも、色々ないたづらをして或は泣いたり或は怪我をしたりして居るやうなもので、小さな悲喜苦樂は信仰なき時代、重大な問題では無くなつて居るのである。

私達は生活の爲に信仰して居るのではない。如來の大生命を獲得せんが爲に生活して居るのである。それが人生の眞義であり人生を完ふすることである。だから信仰中心の人生でなくては本當の人生とは云はれない。信仰中心の生活こそはまた道德生活でもある。信仰を具體的に生活の一つ一つに現はして行くことが即ち道德である。道德を行ふ動機が他から餘儀なくされるものでは本

當でない。自分の内部から爲さざるを得なくなつて來るのでなく
ては本當の意味をなさない。心では嫌であるけれども體裁を飾る
爲にするやうな道德は信仰なきものゝすること。畢竟付屬品で
ある。いくら外に賢善精進の相を現はしても内に虚假を懷いて居
たのでは偽善者である。たとへ外に現はれたものは不完全であつ
ても内に至誠を以て偽らざる行爲をなすのが本當である。

忠と云ひ孝と云ひそれが自然發露のものであつて始めて本當の
忠であり孝である。偽装した忠義、偽装した孝行は一時はごまか
されるかも知れないが何時かは暴露され何時かは化の皮がはがさ
れるにきまつて居る。

是故に信仰生活から現はれる道德は一見不完全のやうに見える
かも知れないが決してにせものではないのである。たとへば平素
は親へ孝行をなすのに力及ばずして不完全のやうであつても、萬
一にも親が他から壓迫され屈辱を受けなければならぬ事が起つた
場合には、屹度身を挺して外敵にぶつかり自分の身は何うなつて
も親を保護することに全力を盡すであらうやうに、やむにやまれ
ず自然に至誠の働いて來るのが本ものである。

私達の信仰生活も亦た誠に不完全かも知れない。然し不完全で
あればこそ至誠を以て偏へに如來を仰ぎ一心に如來を欣慕したて
まつるのである。

私達は段々育てられて來た。だが煩惱生活は一朝一夕のことで

すつかり清められる筈はないのである。煩惱は長載永劫の昔から
やり馴れて來たものである。心の芯まですつかり染みこんで居る
のである。然るに信仰は今始めて得たことである。今ま漸く育て
られて居るのである。それも自分がいけないからこそ如來を仰ぎ
信じたのである。自分には力がないからこそ他力の悲願を頼んだ
のである。

私達は聖者ではない。聖者なら信仰はいらない。聖者にはなり
切れずまたなり得る力もないのである。だから如來の慈悲を仰ぐ
のである。

世には信仰を得れば直ぐ聖者にでもなれると思つて居る人が相
當に多いやうであるが、信仰は聖者になる爲の手段ではない。信
仰が若し聖者になる爲の手段であり、そして信仰に依つて直ぐ聖
者になり得るものならば、何時までもその手段である信仰にかち
りついて居る必要はない譯である。

私達は何處までも愚劣な凡夫であつて聖者ではないのであ
る。

されば特に立つて禮拜するのは信仰の最もよき表現である。五
體を地に投じての禮拜は、自分に少しでも尊大な氣持がある時は
本當に出来るものではない。やつて居ても外形ばかりである。

三唱禮にしろ三身禮にしろ三歸禮にしろ、心から如來の前にひ
れふして誠心を發露する禮拜其ものが、自分を反省する重要な行

爲であるばかりでなく自分の信仰を養つて呉れる最も大切な動作であるが、それ以上に今度の禮拜はもつと意味の深い報恩讃嘆願等の内容を持つて居るものであるから、一層心を籠めて禮拜したいものである。

偕て此「日常勤行式」もあと一回で終りを告げやりとして居るそして段々信仰が進められ段々心が開けて來たことを感ずるのであるが、誠に願ひみて大きな感銘と感謝とを禁ずることが出來ないのである。

私達は本當に幸せ者である。受け難き人の身を受け、遇ひ難き淨土の御法に遇ひ、起し難き信心を起し、喜び難き念佛を喜び得る身になつたのであるからこんな嬉しい事はない。之と云ふのもこの「日常勤行式」の教へて呉れた御蔭であり、如來様の大悲願の御蔭であると痛感する次第である。

字解

攝取 — おさめとること
來迎 — 出迎へて下さること
引接 — 導いて下さること
薩婆若 — 妙智又は一切智のこと
大總持門 — 廣大なる道徳の門
和合衆 — むつみ合ふ世界の譬喩

S.S.S.

金はンベ金
亂にンベ金
賣優にンベ金
すで

金合スエンス
！をンベ



¥150以上

筆年萬合金・スエンス ★

編輯後記

◇歴史は馳足で突進してゐる。

今年はまだ世界的な年であつた。地球上のあらゆるところでどえらい事件が次々と突發した。凡ての民族が噴火山上で踊つてゐる。足元があぶないッ！

◇人類の頭腦はその停止するところを知らぬ旋風の眞つ唯中で混亂を極めてゐるやうだ。この世界史の大轉換を更に轉換し得るものは何人ぞ。それは唯複雑なる事象の背後に單純なるものを把え得たもの、怪奇なる現象の中に平凡なる本質を握み得たもののみ。

◇「淨土」も第五年から第六年に飛躍せんとする。淨土が捧ずる單純平凡なる眞理の旗は更に押し進めなければならぬ。

◇本誌には吉田絃二郎氏の「阪

根翁のこと」を巻頭に鳩山一郎氏その他名士の稿を多く載せた。信仰はありふれた事實の中に生きておらねばならぬ。

◇小説は編輯の都合上割愛したが、その代りに實のある讀物を多くのせた。

◇前號投書に就ての御注意をのせた處、澤山の良い投書を頂いた順次掲載するつもり故あせらずお待ち下さい。その他讀者の御注意御希望等の投書も多數あつたが、それらは次號に纏めて發表するにとゝした。

◇新年號に就いては別項廿四頁に記載した事項を御覽の上奮つて御注文下さい。

◇本誌編輯部員東慈道君は自宅療養後一時原隊に復歸したが近く除隊してまた本誌に活躍する筈。

◇病中の眞野正順先生も快方に向はれ、たまには一二町の御散歩もなさると。喜ばしい限りである。

◇本會出版物の御注文は振替郵便が御便利です。振替口座番號は東京八二一八七番

◇御注文の場合は種類、部數、代價を楷書で明瞭に御書き下さいますやう。尚送料をお忘れなき様お願い致します。

◇勝手乍ら代金引替は一切お断り申上ります。

◇その他の問合せは往復はがさかまたは返信料同封で、御願します。

◇會員で御住所御變更の方は現御住所と共に前住所をも御明記の上御通知下さい。

◇本誌掲載の廣告は一切左の店で取扱つてをりますから廣告掲載御希望の向は直接その方へ御問合せ願ひます。

本誌廣告一手取扱

株式 正路喜社
會社
東京市京橋區銀座西七丁目
電話代表銀座 五七六六

淨土 十二月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和四年十二月三十日印刷納本
昭和四年十二月一日發行

(定價十二錢)

編輯兼 眞野 正順
發行人
印刷人 赤尾 光雄

東京市牛込區市谷加賀町二ノ二
印刷所 大日本印刷株式會社

發行所 法然上人續仰會
東京市芝區芝公園明照會館内
振替東京八二一八七番

「淨土」購讀規定

一部定價 金十二錢
(送料五厘)

會費 金一圓二十錢
(送料不要)

一ヶ年

法然上人鑽仰會刊行圖書

東京市芝區芝公園明照會館
振替口座東京八二一八七番

中村辨康著

(四六版一三〇頁總ルビ付)

法然上人の信仰生活

定價三十錢
送料六錢

中村辨康著

(四六版八〇頁總ルビ付)

信仰讀本

定價二十錢
送料三錢

藤井實應編

菊半截一四四頁
總ルビ付

法然上人法語抄

定價三十錢
送料六錢

佐藤春夫著

特製ノート型、天金
十二ボ總ルビ、三〇〇頁

法然上人
別傳 掬水譚

定價四圓五十錢
送料二十二錢

中村辨康著

(四六版七〇頁總ルビ付)

講話一枚起請文

定價十錢
送料三錢

大野法道著

(四六版六〇頁總ルビ付)

法然上人

定價十五錢
送料三錢

中里介山著

(三六版二五〇頁クロース裝)

法然上人傳

定價六十錢
送料六錢

佐藤春夫・吉田絃二郎・岡本かの子
倉田百三・都芳隨園著

(四六版總ルビ付)

我が信仰

定價六錢
送料三錢

法然上人鑽仰會編

(菊版一一〇頁總ルビ付)

念佛讀本

定價二十錢
送料六錢

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可 (毎月一回一日發行)
昭和十四年十一月廿日印刷納本 昭和十四年十二月一日發行

淨

土 第五卷 第十二號

定價金十二錢 (送料五厘)
滿鮮臺等
外地定價金十三錢